



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	接尾語「うへ」の成立と展開：語彙史の観点から
Author(s)	漆崎, 正人
Citation	北海道大學文學部紀要, 31(2), 91-170
Issue Date	1983-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33473
Type	departmental bulletin paper
File Information	31-52_PR91-170.pdf



接尾語「うへ」の成立と展開

——語彙史の観点から——

漆 崎 正 人

一、はじめに

派生語の後要素である接尾語は、「単独で用いられることがなく、前要素である語基に、意味を添えるだけか、もしくは、意味を加えるとともに品詞性を付与するもの」と通常考えられている。そのため、従来、文法論で扱うべき問題として、同じく非自立形式とされる、助詞・助動詞との区別という点に、関心が集中していた。ところが、文法論的研究からは、自立語と助詞・助動詞との接続が規則的なものに対し、語基と接尾語との接続は一般に語彙的であることが明らかにになっている。そこで、近年、語構成論的立場から、接尾語について、語基との結合の型が語構造の問題として取り上げられるようになったが、なお、接尾語に関する多くの問題が、未処理のまま語彙論の側に持ち越されているのである。

接尾語を語彙論的に扱うといっても、そこには、また、様々な観点があるわけであるが、本稿では、接尾語がどのよ

接尾語「うへ」の成立と展開

うにして成立し展開したかという問題について、語彙史的立場より考察しようと思うのである。もっとも、本稿で取り扱うのは、接尾語「うへ」に関してであり、「うへ」自体の変遷は「語史」であるが、「うへ」について検討することとは、「うへ」を後要素にもつ合成語の変遷を問題とすることでもあるから、依然視野は語彙史的である。

二、現代における接尾語「うへ」

後要素「うへ」の史的変遷を考察するにあたって、まず、その到達点であるところの、現代における接尾語「うへ」について検討しようと思う。

現代語中心の国語辞書の記述を見ると、殆どが、接尾語「うへ」に「目上に対する敬称」という語釈を施している。なるほど、接尾語「うへ」の使用対象は、「父」「母」「伯（叔）父」「伯（叔）母」「兄」「姉」で、「目上」にはちがいないが、それらに限られるから、語義の記述としては不十分である。「めうへ」を△親族関係における上位者▽の意味で使っているとすれば、誤解を招かぬようにもっと明確な表現を選ぶか、『新選国語辞典（新版）』のように、

「うえ【上】△目上の人を尊敬するという語。『母』『用法近親者をさす語につく。改まった場合や手紙などで使う。と、その旨を補説する必要がある。」

実は、接尾語「うへ」の意味を△目上の親族に対する敬意▽とする見解は、早くも大槻文彦博士の『口語法別記』（大正六年・大日本出版）、山田孝雄博士の『敬語法の研究』（大正一二年・宝文館）に見える。△目上の親族に対する敬意▽という規定は、『口語法別記』が嚆矢ではなからうか。

○目上の親族を敬って呼ぶに、「父うえ」「母うえ」「叔父うえ」「叔母うえ」「兄うえ」「姉うえ」など云う「うえ」(上)があり、他人の親族を少し敬って云うに、「親ご」「母ご」「叔父ご」「叔母ご」「兄ご」「姉ご」「嬢ご」「弟ご」「娘ご」「甥ご」「姪ご」など云う「ご」(御)があるが、用いる所が狭い

(四三一頁)

このように、接尾語「うへ」は、『口語法別記』で取りあげられているのであるが、その六年後に刊行された『敬語法の研究』では、「口語の敬語法」について述べたところになく、「候文の敬語法」「普通文の敬語法」のところで扱われているから、大正年間においても、言語意識としては、やはり文語的な表現であったと考えられる。

二 敬意をあらはす接尾辞にして候文に用ゐらるるもの次の如し。

(中略)

「うへ」 上の義なり。自己の尊属親をさす語として親族をあらはす名詞に添ふ。

父上 母上 叔父上 兄上 姉上

(一九二―三頁)

「普通文の敬語法」では、「敬意の接辞」の一つとして、「うへ」があがっている。

「うへ」 人をあらはす名詞の下につく。

父上 叔父上 伯母上

(三三九頁)

と、説明が簡略であるが、「候文の敬語法」において詳述したため省いたのであろう。山田博士は、接尾語「うへ」の意味を八話し手としての目上の親族に対する敬意と解していると思われる。しかし、「うへ」を接尾語とする派生語は、聞き手や第三者の「目上の親族」に対しても用いられているから、八自己と限定する必要はない。

では、現代における接尾語「うへ」の意味を八目上の親族に対する敬意と決定してよいかというと、しかし、なお

接尾語「うへ」の成立と展開

検討の余地があると思われる。そこで、以下の考察によって、現代における接尾語「うへ」の意味を規定しようと思うが、これまでに見られる語釈の不十分さは、意味を漠然と求めたことによると考えられるので、本稿では、一定の分析手順に従って確定していくことにする。

待遇表現にかかわる接尾語の場合、次の分析手順で、意味特徴が求められる。

第一に、類義的表現の比較より抽出される意味特徴がある。この場合、例えば、「をぢ」「をぢさま」「をぢご」「をぢうへ」の相違に注目するのである。まず、待遇的に中性の「をぢ」が、敬称を含む、他の三語から選別される。次に、偶「をぢ」で指されているに過ぎず、素材たる人物に直接向けられた尊敬表現の「をぢさま」が、「伯（叔）父」であることに基づく、尊敬語の「をぢご」「をぢうへ」と区別される。さらに、「をぢご」と「をぢうへ」とは、前者は「伯（叔）父」という「親族」に、後者は「伯（叔）父」という「上位者」であることに、それぞれ、由来する敬意という違いがある。したがって、そこから、接尾語「うへ」に八上位者としての敬意√という意味特徴を認めることができるのである。このような意味特徴を「基礎的意味特徴」と呼ぶことにする。

第二に、個々の発話において、接尾語「うへ」が用いられる使用対象を検討することによって明らかになる意味特徴がある。接尾語「うへ」は、(基準となる人物の)「父」「母」「伯（叔）父」「伯（叔）母」「兄」「姉」に対してしか使われない。「親族関係における上位者」以外の人物に使用されることがないのである。しかも、「親族関係における上位者」であっても、「祖父」「祖母」「従祖父」「従祖母」「曾祖父」「曾祖母」「高祖父」「高祖母」などに対しては用いられないから、接尾語「うへ」の使用対象を「目上の親族」と規定するわけにはいかないのである。すなわち、接尾語「うへ」の使用対象は、「直系の一世代上の親族、準直系の一世代上の親族、準直系の同世代年長の親族」に限られるのである。

よって、使用対象の検討から明らかになる、接尾語「うへ」の意味特徴は、△一世代上以内の親族関係における上位者である。このような意味特徴を「対象の意味特徴」と呼ぶことにする。「親族関係における上位者」を「目上の親族」に置き換えると、接尾語「うへ」の「対象の意味特徴」は、△一世代上以内の目上の親族△ということになる。

「基礎的意味特徴」と「対象の意味特徴」とは、接尾語が固有に持っている意味である。そこで、これらを「自律的意味特徴」と呼ぶことにする。つまり、接尾語「うへ」の「自律的意味特徴」は、△一世代上以内の目上の親族という上位者としての敬意である。

ところで、常に語基に後接する接尾語の場合、「自律的意味特徴」の実現は、専ら前要素に依存している。語基と接合してはじめて接尾語の「自律的意味特徴」は具現するのである。それで、前要素からの接合上の条件も接尾語の意味特徴として認める必要がある。接尾語「うへ」の場合について言えば、「ちち」「はは」「をぢ」「をば」「あに」「あね」だけが語基となるのである。使用対象が「父」「母」「伯（叔）父」「伯（叔）母」「兄」「姉」であっても、「おや」「てて」「おふくろ」「はくふ」「しゅくぼ」「じっけい」「ねえ」などを前要素とすることがないのである。「父」「母」「伯（叔）父」「伯（叔）母」「兄」「姉」を、性を区別した、待遇的に中性で、もともと一般的な捉え方をしたときに、接尾語「うへ」の「自律的意味特徴」が実現されるのである。すなわち、接尾語「うへ」における、前要素からの意味的条件は、△父・母・伯（叔）父・伯（叔）母・兄・姉の一般的把握であるが、これを、接尾語「うへ」の「接合的意味特徴」と呼ぶことにする。

以上の考察より、現代における、接尾語「うへ」、「うへ」を後要素とする派生語の意味を整理すると、次のようになる。

接尾語「うへ」の成立と展開

接尾語「うへ」

1 自律的意味特徴

① 基礎的意味特徴……△上位者としての敬意▽

② 対象的意味特徴……△一世代上以内の目上の親族▽

2 接合的意味特徴……△父・母・伯（叔）父・伯（叔）母・兄・姉の一般的把握▽

「ちちうへ」……△一世代上以内の目上の親族という上位者としての父の敬意的把握▽

「ははうへ」……△一世代上以内の目上の親族という上位者としての母の敬意的把握▽

「をぢうへ」……△一世代上以内の目上の親族という上位者としての伯（叔）父の敬意的把握▽

「をばうへ」……△一世代上以内の目上の親族という上位者としての伯（叔）母の敬意的把握▽

「あにうへ」……△一世代上以内の目上の親族という上位者としての兄の敬意的把握▽

「あねうへ」……△一世代上以内の目上の親族という上位者としての姉の敬意的把握▽

三、中古における後要素「うへ」

「うへ」を後要素にもつ合成語——以下、単に、「——うへ」形式と呼ぶこともあるが、ただし、本稿では、「お（御）」「おほ（大）」「おほん（御）」「おん（御）」「こ（故）」のような接頭語（ないしは接頭語的な形式）に直接「うへ」が後接するものを考察の対象から外す——は、平安時代の中頃から見えはじめる。

『宇津保物語』には、「ははうへ」が一例、

大殿の御はらの女きんだち五所はうへわたり給べきかた也

『枕草子』にも、「ははうへ」が一例、

また小野殿のはうへこそ普門寺といふ所に八講しけるを聞て

『源氏物語』には、「あまうへ」が五例、

あまうへにはもてはなれたりし御けしきのつゝましきにおもひ給ふるさまをも

かのあまうへいたうよわり給にたればなに事もおほえすとなむ申して侍し

これもこあまうへのこの御事をおはして御をこないにもいのりきこえ給し

少納言なども人しれすこあまうへの御いのりのしるしとみたてまつる

あまうへとうかへらせ給はなん此御五みせたてまつらむ

「ははうへ」が三例見える。

心くるしきこと御心さしありてとふらひ物せさせたまへとはうへにもきこえ給

はうへのかなしうし給ておもたゝしうけたかきことをせんとあかめかしつかる

こひめ君はみやの御方さまに我ははうへにたてまつりたるところはいふなりしか

北山谿太氏は、『源氏物語のことばと語法』(昭和三十一年・武蔵野書院)の中で、中古における後要素「うへ」は、「貴人の妻」に対して単独で用いる「うへ」と同じ意味だと述べている。

「うへ」は、貴人の妻の敬称に用いられる。北の方というに同じ。「母上」は、貴人の妻であつて、しかも人の母

(「楼の上下」四六六頁)

(二八八段・七六八頁)

(「若紫」一七一頁)

(「若紫」一七七頁)

(「紅葉賀」二四三頁)

(「賢木」三四七頁)

(「手習」二〇二頁)

(「柏木」一二四三頁)

(「東屋」一七九七頁)

(「東屋」一八三二頁)

接尾語「うへ」の成立と展開

であるから、「うへ」の上に、母を冠したのである。母北の方ともいう。「尼上」は、もと貴人の妻であつて、今は尼になつてゐるものの称。大日本国語辞典や大言海は、母上を、母の尊称として、平安朝の作品から例を挙げてゐるが、どうかと思われる。「うへ」が前記のような意味であるから、物語の当時には、父うへ・兄うへという語は、あり得なかつたのである

(一九八頁)

北山氏の指摘どおり、中古における後要素「うへ」を、『大日本国語辞典』や『大言海』は、敬称の接尾語と認めてゐるのであるが、普通にはどのように解されてゐるのかを知るために、古語辞典、古語をも収めた国語辞典を、後要素「うへ」の項、「うへ」を後要素にもつ合成語の項について、調べてみた。その結果、複合語の後要素としての「うへ」を確実に認めてゐるのは、『講談社古語辞典』の「ははうへ」の項だけである。

ははーうへ【母上】^{エ:ウ} (名) 「うへ」は貴人の妻の意。現在のような母の敬称ではない。「母北の方」と同じ。

「ーにも聞こえ給ふ」△源・柏木▽枕源

ところが、「あまうへ」の項では、

あまーうへ【尼上】^{エ:ウ} (名) 「尼の敬称」尼君。△源・若紫▽源

と、「あまうへ」を派生語と捉えており、また、後要素「うへ」のところでも、「目上の者をよぶときに下につける」として、語例「あまうへ」「ちちうへ」を挙げている。したがって、『講談社古語辞典』の場合、『源氏物語』や『枕草子』などに見える「ははうへ」の「うへ」に関してのみ、複合語後要素と認めてゐることになる。勿論、後要素が同じ形式だからといって、その形式を後要素とする合成語が、皆同時期に意味変化を起こすとは限らない。意味変化に遅速があつても不思議はないが、「うへ」を後要素にもつ、「あまうへ」と「ははうへ」との間に、「うへ」の意味の違いに基づ

く、意味の相違が指摘できなければ、「うへ」の意味は同じと考えるのが穏当であろう。

北山氏の見解には、残念ながら論証過程がないのであるが、接尾語化の過程が複合語後要素からの変遷と捉えることができるならば、文献にあらわれた、初期の形式について、第一に複合語後要素としての解釈の可能性を検討すべきである。

中古では、「うへ」が単独で男性に用いられる場合、「天皇」「上皇」に限られ、しかも、当時「ちちみかど」はあるが、「ちちうへ」の形式は存しない。また、「あま」「はは」を前要素にもつ合成語は、「あまぎみ」「あまみや」「ははきさき」「ははきたのかた」「ははぎみ」「ははみや」など、この時代には、前要素と後要素とが同格的に結合した複合語、もしくは、以前はそうであったろうと期待されるものが多く、そして、「あまうへ」「ははうへ」も、それぞれ、「あま」である「うへ」「はは」である「うへ」と同格的に構造を分析できるので、後要素「うへ」が、女性に対して使われるところの、「うへ」の単独用法に由来することは確実である。しかしながら、それだけを論拠に、中古において、後要素「うへ」が自立形式であったと主張することはできない。すでに意味変化が起こり、単独用法と後要素との意味が隔たったものになっているかもしれないのである。

そこで、後要素「うへ」の用例の比較的多い『源氏物語』から、「あまうへ」・「ははうへ」と、それらの類義的表現の「あまぎみ」・「ははぎみ」「ははきたのかた」との使用例・使用対象を比較してみた。

1 「あまうへ」「あまぎみ」

A 「あまうへ」……5例

北山尼君(4) 小野妹尼(1)

接尾語「うへ」の成立と展開

B 「あまぎみ」……116例

小野妹尼(36) 弁尼(29) 明石尼君(28) 北山尼君(10) 大式乳母(5) 空蟬(3) 小野尼君(3)

惟光乳母(1) 少将尼(1)

2 「ははうへ」「ははきたのかた」「ははぎみ」

A 「ははうへ」……3例

四君(一)(1) 中将君(伍)(1) 八宮北方(1)

B 「ははきたのかた」……16例

雲居雁(5) 四君(一)(3) 按察使大納言(一)北方(2) 常陸宮(一)北方(1) 式部卿宮(一)大北方(1) 葵

上(1) 真木柱(1) 八宮北方(1) 中将君(伍)(1)

C 「ははぎみ」……75例

中将君(伍)(27) 夕顔(11) 明石上(9) 明石尼君(8) 髭黒元北方(7) 葵上(3) 按察使大納言

(一)北方(2) 真木柱(2) 桐壺更衣(1) 按察使大納言(二)娘(1) 按察使大納言(三)北方(1) 惟光妻

(1) 雲居雁(1) 八宮北方(1)

「あまうへ」の五例、「ははうへ」の三例に対して、「あまぎみ」「ははぎみ」は、それぞれ、一一六例、七五例もある。無論、単純な比較はすべきでないが、それにしても、「きみ」系(以下、「あまぎみ」「ははぎみ」の総称とする)が「うへ」系(以下、「あまうへ」「ははうへ」の総称とする)の二〇倍以上の用例数であり、そして、「ははうへ」の用例が複合語の「ははきたのかた」よりも少ないことから、後要素「うへ」が接尾語になっていたとは考えにくい。使

用対象の検討からも、「きみ」系の派生語性、「うへ」系の複合語性が窺われる。「あまうへ」「ははうへ」と呼ばれる人物は、皆作品中、「うへ」と呼ばれることがあるが、「あまぎみ」「ははぎみ」の方は、必ずしもそうではなく、「ははぎみ」は、皇子の母たる「桐壺更衣」から、「光源氏」の妻室の数に入らず、実際には「うへ」と呼ばれることのない「明石上」などまで幅広く使われているし、「あまぎみ」の方は、女房クラスに対しても盛んに用いられている。もしも、後要素「うへ」が敬称の接尾語であれば、換言すれば、「うへ」系における、意義上の重点が前要素にあるならば、少なくとも「きみ」系と同程度の用例が期待されるが、話題となる機会・登場場面の少ない、「四君(一)」「ははうへ」一例・「ははぎみ」ナシ、「八宮北方」(「ははうへ」一例・「ははぎみ」一例)を別にする、「北山尼君」(「あまうへ」四例・「あまぎみ」一〇例)、「小野妹尼」(「あまうへ」一例・「あまぎみ」三六例)、「中将君(四)」(「ははうへ」一例・「ははぎみ」二七例)は、いずれも「きみ」系の方が相当多いのである。これらのことから、「うへ」を後要素にもつ合成語の意義上の重点は前要素にないことがわかる。つまり、『源氏物語』における「——うへ」形式は、なお複合語なのである。

次に、『宇津保物語』『枕草子』の「——うへ」形式についてみると、『宇津保物語』の「ははうへ」の例は、「左大臣正頼の正妻」に用いたもので、文脈上からも、△母なる上▽と解して問題がなく、『枕草子』の「ははうへ」は、「小野殿」という呼称が不明なため、断定はできないけれども、強いて派生語と認めなければならぬ事由は見当らない。やや問題があるとすれば、「ははうへ」が「小野殿(の)」という修飾語を伴っていることである。接尾語を後要素とする派生語の語基は、一般にかなり自由に修飾語をとることが知られている。しかし、複合語の「ははきたのかた」にも、『枕草子』のこの例と同種の修飾語をとったものが存するのである。

接尾語「うへ」の成立と展開

このひめきみのはゝきたのかたのはらからよにおちふれて

〔『源氏物語』「蓬生」五二四頁〕

ちちはこのひめ君たちの母きたのかたのはゝかたのをち左中弁にてうせにける

〔同右・「椎本」一五六九頁〕

言うまでもなく、この種の連体修飾語は、「きみ」を後要素とする派生語の場合にも見える。

大将のはゝ君をおさなかりしほとにみそめてやむことなくえさらぬすちには

〔同右・「若菜下」一一六五頁〕

君の御はゝ君のかくれたまへりし秋なむよにかなしきことのきはには

〔同右・「柏木」一二六〇頁〕

むかし大将の君の御はゝ君うせ給へりし時のあかつきを思いつるにも

〔同右・「御法」一三九三頁〕

そうすると、修飾語の点からは、一見相違がないようであるが、「きみ」系は次のように同格的な（連体）修飾語をとることができるのである。

うつせみのあま君にあをにひのをりものと心はせあるをみつね給て

〔同右・「玉鑿」七五四頁〕

ならさかといふ山こえける程よりこのはゝのあま君心ちあしうしければ

〔同右・「手習」一九八九頁〕

といふをいもうとのあま君きゝ給て何事そとゝふ

〔同右・「手習」一九九四頁〕

これは、「きみ」系の場合、前要素と後要素との同格的な結合関係が崩れ、意義上の重点が前要素にあるために、前要素は同格的な修飾語をとりうるのに対し、「うへ」系は、前要素と後要素とがなお同格的に結びついているから、同格的な修飾語が用いられないのだと考えられる。

こうしてみると、「ははうへ」は、「ははきみ」より「ははきたのかた」の方に意味が近いということになるが、北山氏の説くように「ははきたのかた」の同義語と認めてよいのだろうか。しかしながら、その場合、「あまきたのかた」という形式が存しない理由が説明できないのである。このことは、やはり「うへ」と「きたのかた」との意味の違いに

よると思われる。

確かに、「うへ」と呼ばれる女性には「貴人の妻」であることが多いが、「天皇」「上皇」と区別する必要があるときには、それぞれ、通常「とのうへ」「うちのうへ」「みんのうへ」と呼びわける。すなわち、「貴人の妻」であるところの「うへ」は△殿における上▽であり、「天皇」「上皇」は、それぞれ、△内における上▽△院における上▽ということになる。この三者は、おのおの、「殿」「内」「院」という世界において、頂点に立つ人物であることを抽象して「うへ」と呼ばれるのである。つまり、「貴人の妻」が「うへ」と表現された場合、その人物は、△妻▽としてではなく、△女主▽として捉えられているのである。「うへ」が△女主の敬意的把握▽であり、「きたのかた」は△妻の敬意的把握▽であるという意味の相違があるからこそ、『源氏物語』などの中古の「物語文学」では、会話文において、話し手の「実母」や「妻」や「女主」に対して、「うへ」が使われているのに、「きたのかた」は用いられないというような分布の相違が存するのである。『枕草子』に、

うへなといひてかしつきすへたるに心にくからすおほえんことはりなれと

(二一段・五五頁)

とあるのは、その世界の中心にあって、周囲から大切に待遇される「うへ」という「女主」の一般的なあり方を述べたものにほかならないのである。

「あまうへ」「あまきたのかた」という形式をめぐる問題も、「うへ」「きたのかた」の意味の違いに基づくものである。「あまきたのかた」の形式が存しないのは、「あま」と「きたのかた」との結合が意味的に忌避されるからである。つまり、「きたのかた」は△妻の敬意的把握▽であるがゆえに、△出家した女性▽の「あま」と共起 (cooccurrence) しえないと解されるのである。もっとも、「仏門に入った女性」に「きたのかた」が用いられることもある。『源氏物

接尾語「うへ」の成立と展開

語』にやや後れて成った『榮花物語（正篇）』には、出家後の「道隆妻」に、

北方やがて尼になり給ひぬ（中略）北方の御兄の何くれの守ども

（巻四・上―一四五頁）

北方は其まゝに御心地あしうて、物ももまいらで、年ごろの御念誦も懈怠して

（巻五・上―一七二頁）

北方はせちに泣き恋奉り給。見聞奉る人ゝもやすからず思ひ聞えたり

（巻五・上―一七四頁）

などと、「きたのかた」が使われているので、「あまきたのかた」が見えないのは偶然ではないかという疑いも生じてくるが、『榮花物語（正篇）』には、出家後の「道隆妻」に「きたのかた」を後要素とする「ははきたのかた」も、

母北方・宮の御前・御舅の人ゝ例の涙にもあらぬ御涙ぞ出で来て

（巻五・上―一六三頁）

近う御車寄せて乗らせ給に、母北方やがて御腰を抱きて續きて乗らせ給へば

（巻五・上―一六九頁）

かくいふ程に、神無月の甘日餘りの程に、京には母北方うせ給ぬ

（巻五・上―一七九頁）

などに見え、しかも、後述の如く、「あまうへ」が三五例もあり、「あまきたのかた」がたまたま使用されていないと見るのは、いかにも不自然である。では、「出家尼」に対して、「きたのかた」は使うことのできる場合があるのに、「あまきたのかた」が存しえないのはなぜか。このことは、「妻」の出家がいかなる意味であったかということ考察しなければ明らかにできないと思われる。『榮花物語（正篇）』には、「公任妻」の出家後の「公任」の様子を叙述したところがあるが、

されど年頃尼にておはしませば、大納言殿はやまめのやうにておはすれど、ほか心もおはせねば、たゞこの姫君をいみじきものに思ひきこえさせ給へるに

（巻一〇・上―三三八頁）

と、独身者のような状態、妻があつてなきが如しであったという。また、「孝標妻」も夫の在世中に出家した女性であ

るが、「孝標女」は、出家した母の代わりに、自分が切り盛りしなければならなかった事情を次のように『更級日記』に書いている。

はゝあまになりておなし家の内なれとかたことにすみはなれてありてゝはたゝ我をおとなにしすへて我は世にもいてましらはすかけにかくれたらむやうにてゐたるを

すなわち、「妻」の出家は、「妻」でありつつ、「妻」の役割を放擲することを意味するのである。したがって、「出家した妻」に、「あまきたのかた」という形式が使われないのは、△尼▽として捉えた時、その人物の、「妻としての役目を果たさない」という要素が強く意識されるからであり、「きたのかた」が用いられるのは、「尼」という側面が捨象された場合のみで、その際、素材の、「妻としての役目を果たさない」という要素が無視され、「妻」だけが残るからなのである。

複合語の構成という点からは、「きたのかた」と「うへ」との間に、ほかにも相違が見られる。「きたのかたのかた」の場合、「はは」のほか、同じく「二親等以内の目上の親族の女性」である、「あね」「おば（祖母）」を前要素とする、「あねきたのかた」「おばきたのかた」の形式が、

姉^{あねきた}北^{きた}の方^{かた}の御返^{みへし}（改行）山路^{やまぢ}しる鳥^{とり}にわが身^みをなしてしが（『多武峯少将物語』〔姉北の方〕一三頁）

かの御をは北の方なくさむ方なくおほししつみておはすらん所にたに（『源氏物語』「桐壺」一九頁）

のようにあるが、「うへ」の方は、「あねうへ」「おばうへ」の語形が『源氏物語』やこの頃の他の作品に見えず、「あまうへ」「ははうへ」に限られる。「はは」と「あま」にだけ共通する意味特徴を取りだすのは困難であるし、「あまうへ」「ははうへ」の用例数が非常に少ないから、前要素の「あま」と「はは」は「うへ」をより明確にするために添えられたも

接尾語「うへ」の成立と展開

のと思われる。言い換えれば、この期における「——うへ」形式は、意義上の重点が後要素にあるということである。なお、同時代の「古記録」の『御堂関白記』には、「あまうへ」が二例存する。

一条尼上観音寺作無常所、修小法事、依有可慎事

△寛弘七年九月二十九日の条▽（中一七六頁）

今日一条尼上渡観音寺、是存生作置舎所也

△長和五年八月一日の条▽（下一七〇頁）

これらは、ともに「故一条左大臣源雅信妻穆子（道長義母）」に用いたものであり、特に問題はない。

以上から、『源氏物語』の成立ごろまでの、後要素「うへ」、「あまうへ」「ははうへ」の意味をまとめると次のようになる。

後要素「うへ」……△女主の敬意的把握▽

「あまうへ」……△尼である女主の敬意的把握▽

「ははうへ」……△母である女主の敬意的把握▽

ところで、『源氏物語』の成立後二〇年程経て成った『栄花物語（正篇）』には、「あまうへ」が三五例も見えるし、

大納言も尼上あまうへもいうみじうおぼして、さまみの御祈いのりどもいみじ
（卷一一・上―三五四頁）

一条殿あまうへの尼上、大宮の宮達見奉りしに、我命わがいのちはこよなう延のびにたり
（卷一一・上―三五六頁）

尼上あまうへ、いみじうしつらひて、我われもいみじく心懸こころけきせさせ給て
（卷一一・上―三五六頁）

〔他三二例〕

また、「ははうへ」も八例存する。

母上ははうへは、九条殿の御女登むすめ華殿の内侍のかみの御腹はらに、延喜のみかどの御子の重明の
（卷二・上―九一頁）

母上例の女に似給はず、いと心かしこくかどくしくおはして

(卷三・上一〇九頁)

かくてこの母上、この三位殿の御事を心づきにおぼして、たゞいそぎに急がせ給を

(卷三・上一〇九頁)

〔他五例〕

このような、『栄花物語（正篇）』における、「うへ」を後要素にもつ合成語の用例の増加は、「――うへ」形式の使用の浸透・定着化を示すものであるが、また、「――のうへ」という形式の用例も極めて多いことが注目される。例えば、「とののうへ」（「とののうへのお（ん）まへ」三例を含む）は五三例も使用されている。「――うへ」形式、「――のうへ」形式の、両方の用例が多いのは、同じ理由によると思われる。すなわち、『栄花物語（正篇）』には、貴族階級の「女主」が多数登場し、単に「うへ」だけでは個々の人物を十分に規定できないために、「――うへ」・「――のうへ」の両形式が多く使われたのである。したがって、『栄花物語（正篇）』においても、「――うへ」形式の意義上の重点は、なお「うへ」にあると見てさしつかえなからう。

中古後期——本稿では、一一世紀後半の五〇年間とする——成立の「物語文学」、『夜の寝覚』『狭衣物語』『浜松中納言物語』にも、「あまうへ」「ははうへ」の用例が見える。

『夜の寝覚』には、「あまうへ」が二例、

尼上は、見そめ奉り給にし後、かた時、目はなち奉らずのみならひ給へる

(卷四・三〇三頁)

尼上の、小姫君をこひなき給ふさまの、罪えがましきを、あからさまに

(卷四・三〇四頁)

「ははうへ」が一例存する。

接尾語「うへ」の成立と展開

母上^{はうへ}の御兄^{せうと}、宰相^{さき}といひし人の、女二人^{むすめ}、男子一人^{おのこひとり}ありしは、法師^{ほうし}になりて
これらは、使用対象、文脈上とも特に問題はない。

『狭衣物語』には、「ははうへ」が八例見える。

仁和寺^{にだ}の何がしの阿闍梨^{あざり}の車にて母上^{はうへ}の太秦^{うづまさ}に参りて帰らせ給なり

はうへは、華^{はな}やかに物好み^{ものこの}し給ふ本性^{ほんじやう}にて、(斎)院^{いで}の御有様^{おのさま}、見たてまつり給も

母上^{はうへ}聞き給ひてよしとの給しかと、まれ／＼思出^{いで}て、おぼれしどけなき声^{こゑ}にて

〔他五例〕

八例中、「洞院上」(三例)、「堀川上」(二例)、「後式部卿宮北方」(一例)に用いた六例に関しては、使用対象・文脈上とも問題がない。ここに引いた、最初の例は、この場面でしか話題にならない人物で、検討材料に乏しいが、二重敬語が使用されており、高貴な女性であることは疑いない。三例目は、「今姫君」の実母の「一条院后侍女」に対して用いたものである。「一条院后侍女」は、「堀川大殿」の妻室とは認められていなかったようであるが、堀川邸の外で一生を過ごした女性なので、彼女を頂点とし、侍女たちなどからなる世界を想定することは可能である。

『浜松中納言物語』には、「あまうへ」が四例、

あまうへの御れうにはにひ色の御そにちやうし染のうすものううちき

あまうへはそゝろなる心地し給へれともろこしの御文見給

あまうへのおはせしかたなとをみ給へはたゝ有しなからあけくれよみ給し

(巻三・四〇一頁)

(巻三・四〇四頁)

(巻四・五八七頁)

〔他一例〕

(巻一・五〇頁)

(巻一・六五頁)

(巻三・二二八頁)

(巻三・二三四頁)

「ははうへ」(「ははきき」一例を含む)が二〇例存する。

よろつよりもははうへをそむきておもはせ給はんふけうのつみいとおそろし

(巻一・五四頁)

みかにも母うへにも三年かうちにゆきかへるへしといとま申しほとにもなりぬ

(巻一・一二二頁)

母うへをはしめ大將殿の姫君などこひしくおほつかなき人おほくこのよの人の

(巻一・一二三頁)

〔他一七例〕

これらは、いずれも、使用対象・文脈上からは問題がないが、「ははうへ」の用例が比較的多いことについては検討しておかねばならない。『栄花物語(正篇)』とは異なり、貴族階級の「女主」がさして登場しないからである。「ははうへ」の二〇例に対して、「ははきき」(「ははきき」一例を含む)の用例は一四例と、やや少ない。しかも、「ははうへ」の全用例中一九例までが「左大將北方」に対して用いられたものであるのに、「左大將北方」に対しては、「ははきき」が使われていないのである。「左大將北方」は、この物語の主人公の「中納言」の母であり、△母▽として捉える場面が少なくないのだから、後要素「うへ」が敬称の接尾語化している可能性もあるわけである。しかし、「ははきき」が全く使われないというのは、むしろ不自然のように思われる。なぜなら、「ははうへ」が用いられている「大式北方」に三例、「あまうへ」と呼ばれることのある「吉野尼君」に九例、それぞれ、「ははきき」が使われているからである。「左大將北方」に「ははきき」が全く使われないのは必然的なことではなからうか。「左大將北方」を△母▽として捉えた場合、単なる「母」の尊敬表現が使用できない理由があるように思うのである。「左大將北方」は、「うへ」(三四例・「たいしやうどののうへ」「とののうへ」を含む)と呼ばれるのが普通である。これが、「左大將世界」「中納言世界」の「女主」という立場ゆえの当然の結果であるとすれば、単に「母」を敬った語で指しえないことも物語の設定上から

接尾語「うへ」の成立と展開

の制約と考えるのが自然である。実は、「左大将世界」「中納言世界」には、「母」たる人物として、「左大将北方」のほかに「左大将大君」もいるのである。「左大将大君」は、彼女が義兄「中納言」の子（児姫君）を宿していることを、「中納言」の渡唐中に知った父「左大将」によって、継母「中納言母」の邸に移され、その後間もなく、出家し、出産するという運命を迎った人物で、「中納言母」の支配下にあり、「うへ」とは呼ばれない女性である。それは、例えば、「左大将北方」「左大将大君」「左大将中君」の三人について述べているところに、

物さはかしきまていまめかしきにとのうへ姫君宮のうへなとひとひとつにて

（巻四・六三二頁）

と、「左大将大君」だけは、「ちゆうなごんのうへ」のような「——（の）うへ」形式が用いられず、「ひめぎみ」が使われていることから明らかである。つまり、「左大将世界」「中納言世界」には、「うへ」と呼ばれうる「母」たる女性と、そう呼ばれることのない「母」たる女性とがいるために、「左大将北方」を「母」として捉える場合、「左大将大君」と区別するうえで、常に「女主」として捉える必要があり、「ははうへ」ばかりが使われていると解すことができるのである。とすれば、「——うへ」形式における、意義上の重点が以前は「うへ」にあったのであるが、この期には、前要素と後要素とが意義的にはほぼ対等になっていることになる。

なお、この期の「古記録」では、『水左記』に、「あまうへ」が二三例、

已剋參南殿、尼上日者不例御坐也

△承暦元年九月九日の条△（五四頁）

明日於雲林院尼上御方可被供養御経、請僧九口

△承暦四年閏八月二十三日の条△（一一七頁）

明日南殿尼上於雲林院可被供養涅槃經等

△永保元年七月十六日の条△（一四五頁）

〔他二〇例〕

「ははうへ」が三例見える。

天晴、今日皇后宮母上御念仏也、此事^(有カ)□法興院

彼母上此四五日依心地不例、自南殿釣殿被渡件家

晴、早旦參南殿、今晝宰相源中将母上入棺

これらは、いずれも、特に問題はない。

中古後期末——政治史的には、院政初期に相当する——の成立と思われる『榮花物語(統篇)』には、「あまうへ」が二例、

尼上^{あまうへ}の御方に候^{さだち}ふ人を忍^{しの}びつゝいみじうおぼしめすといふ事出^いで来て
尼上^{あまうへ}のさる物憎^{にく}みをせさせ給ければ、かたはらいたがりて紛^{まぎ}らはして

「おばうへ(祖母上)」が二例、

見出^{みいだ}し給へる女御殿よりも、宰相の北方祖母上^{おばうへ}などいかなる心地^ちし給けん

祖母上^{おばうへ}、おほち殿など、まだいといったうも老^おひ給はでものせさせ給^{たま}ふ

「ははうへ」が五例見える。

ははうへの御心のうち、大納言殿など、取り集^{あつ}めいはん方^{かた}なき御心の

母上^{ははうへ}は三条殿とぞ聞^{きこ}えさするも、候^{さぶら}はせ給て参^{まゐ}らせ給へり

大夫殿うゑ・母上^{ははうへ}など、いかなる御心地かはせさせ給けん

△康平七年五月二十三日の条▽ (七頁)

△承暦元年九月十日の条▽ (五五頁)

△承暦元年九月十五日の条▽ (五六頁)

(卷三一・三四八頁)

(卷三六・四四七頁)

(卷三八・四九三頁)

(卷三九・五一七頁)

(卷三五・四二三頁)

(卷三六・四四六頁)

(卷三七・四七四頁)

〔他二例〕

接尾語「うへ」の成立と展開

この中で問題なのは、卷三八の「おぼうへ」の例である。『日本古典文学大系』本の頭注では、「宰相の北方」と「祖母上」とを同一人物と見なし、「基平北の方、すなわち若宮の外祖母などは」という釈義を施している。もしも、「宰相の北方」と「祖母上」とが同一人物であり、「うへ」の意味が「女主の敬意的把握」であれば、「きたのかた」「うへ」と、近い意味の表現を繰り返すことになり、人物の系統や官位などを述べる文（「人物規定文」と呼ぶことにする）ならともかく、この場合は、かなり不自然である。そこで、「宰相の北方」と「祖母上」が同一人物に対して使われた表現だとすれば、「うへ」は敬称の接尾語化していると考えられる。

ところが、「人物規定文」以外では、親族語彙が同格的な関係に立つ成分の構成にあぶかるとき、

上の御兄の源大納言・内大臣殿の中将をそ子にし奉らせ給ける

（卷三二・三七三頁）

すけふさの宰相の女大納言の君抱き奉らせ給て、侍従の内侍御剣取りて参れり

（卷三八・四八八頁）

一品宮は藤壺、故右大殿々女御は承香殿、二宮の御母の女御は梅壺におはします

（卷三八・四九三頁）

というように、一般に先行成分となるのに、先の例では、「祖母上」が後置されているのである。

次に、「人物規定文」の例を、『栄花物語（続篇）』に成立時期の近い『大鏡』から拾うと、

此おとゞの御女、だいごの御時の后、朱雀院并村上二代の御母后におはします

（卷二・六八頁）

さるは、帥中納言殿のうへの、六条殿のひめぎみは、母は三条殿の御女におはすれば、御まごぞかし

（卷二・九二頁）

大藏卿の御子は、あはたどの々北方、いまの左衛門督の母上。この御ぞうかやうにぞ

（卷三・一二六頁）

と、親族語彙が後行成分となっているものがあるが、その場合は必ず親族語を限定する修飾語を伴っているのである。

後要素「うへ」……△女主の敬意的把握▽

「あまうへ」……△尼である女主の敬意的把握▽

「おばうへ」……△祖母である女主の敬意的把握▽

「ははうへ」……△母である女主の敬意的把握▽

なお、前要素と後要素とは、意義的に対等である。

四、中世における後要素「うへ」

院政期——本稿では、一二世紀初頭から鎌倉幕府の開設までとする——成立の、『大鏡』や『今昔物語集』、源経信の『大納言経信集』、源俊頼の『俊頼口伝集』や『散木奇歌集』、西行の『山家集（聞書残集）』、『擬古物語』の『今とりかへばや物語』や『在明の別』には、「あまうへ」「ははうへ」の例が見える。

『大鏡』には、「ははうへ」が六例、

いくべくもおぼえたまはざりければ、はうへに申たまひけるやう

（卷三・一三五頁）

母上は、君をこそ、あにぎみよりはいみじうこひきこえ給めれときこえければ

（卷三・一三六頁）

このおほきおととの御母上は、延喜のみかどの御女、四宮ときこえさせき

（卷三・一六二頁）

〔他三例〕

『今昔物語集』には、「ははうへ」が二例、

接尾語「うへ」の成立と展開

母上ハ中ニ立テリ、行^{ユキ}テ見給ヒケル。

(卷一五・三一四〇三頁)

此介殿ノ母上ヲ迎ヘ取給テ後ヨリハ、可然契ヤ御スラム、亦无者ニ傳^{カシヅ}キ給テ

(卷二六・四一四一九頁)

『大納言経信集』には、「あまうへ」が一例、

四月祭のほど、朱雀の尼上ときこゆる人に、ながききぬをおこせ給^{たまふ}とて

右大臣殿願房

(一九二頁)

『俊頼口伝集』には、「あまうへ」が一例、

おいたりける人のきびしくたづねさせたまひければあまうへ(改行)浦無て

(上・一九〇頁)

『散木奇歌集』には、「あまうへ」が二例、

むかしのあまうへにおくれたりし時人のもとよりをくりて侍りける

(第六「悲歎部」・三九三頁)

尼上うせ給てのちみらくのしまの事をおもひ出てよめる

(第六「悲歎部」・三九五頁)

『山家集(聞書残集)』には、「あまうへ」が一例、

大原に尾張^{おほはら}の尼上と申す智者のもとにまかりて兩三日ものがたり申^{をばり}(して)かへりけるに

(二九一頁)

『今とりかへばや物語』には、「ははうへ」が一〇例、

たゝはゝうへ御めのとさらぬはむけにちひさきわらはなとにそみえ給ふ

(卷上・三六頁)

たゝはゝうへの人にをされぬおほえあなつらはしからさめるをみすてたてまつりては

(卷上・一二八頁)

れいならすいとあるへしうの給にはゝうへこはいかなる事そとあさましくなりて

(卷中・三三五頁)

[他七例]

『在明の別』には、「あまうへ」が二例、

あなかに物つゝみ給あまうゑをくのき丁のほころひよりめをはつかにて
あまうゑはよろつをしとられたてまつりてわか御みゆかしうおほさるれば

(卷三・五四一頁)
(卷三・五四六頁)

「ははうへ」が一三例ある。

はうゑはよもすからなきあかしてもたゝひとつ御心のくせの心つきなさこそ
とおほしなりてはうゑにそいとしのひて御せうそこきこえ給
はうゑにみえたてまつらしと思ひいられしひとつしの御心まとひを

(卷一・二四一頁)
(卷一・二五三頁)
(卷一・三四四頁)

〔他一〇例〕

これらは、いずれも、使用対象・文脈上など特に問題となる例はない。

また、同時期の「古記録」では、『中右記』に、「あまうへ」が五二例、

参大納言殿并一条殿、終日祇候、尼上近日頗不例御也

△寛治八年六月六日の条▽(一一一五五頁)

抑一条堂給下官由、今夜尼上所書給也

△承徳元年十二月二十四日の条▽(二一六九頁)

訪宰相中将并僧都、彼母堂尼上昨日曉入滅

△大治五年七月二十六日の条▽(六一二一六頁)

〔他四九例〕

「ははうへ」が三例、

晩頭参一条殿、左大将殿母上今夜令渡大將殿給間

△承徳二年十一月五日の条▽(二一一二七頁)

次更婦賀陽院給、太后御方、母上御方

△嘉承二年十二月二十九日の条▽(三一三〇六頁)

次奉拝大殿、北政所、并母上、於北御門、乗御車給

△天永二年正月二十四日の条▽(四一一四頁)

接尾語「うへ」の成立と展開

『殿暦』には、「あまうへ」が一七例、

一条尼上重煩給之由右大弁被^{〔申力〕}辰剋許參院

戊剋許退出、向一条尼上許、依神事白門外還了

戊剋許頭弁来、日次依宜相合、尼上事後未相合也

「ははうへ」が二例、

余母上從一位、右衛門佐宗章叙四位

件年七月鷹司母上正日法事日、宇治令渡給

『永昌記』には、「あまうへ」が三例、

此次被訪仰九条尼上事、感歎有餘者歟

白几帳等分給女房云々、楊梅尼上渡坐

此夜向六角尼上許、為訪日来不例也

『長秋記』には、「あまうへ」が二例、

付忠清奉大將亭退出、祖母尼上入没之由告之

尼上法事、^{〔当正日〕}西界二尺五寸阿彌陀經二部

『兵範記』には、「あまうへ」が二五例、

導師、権亮、下官等会合事了、尼上相伴婦六条

△康和四年十二月二十七日の条▽（二一七八頁）

△康和五年二月十二日の条▽（二一九七頁）

△康和五年三月十六日の条▽（二二〇五頁）

〔他一四例〕

△永久三年二月十二日の条▽（四一五一頁）

△永久三年三月十二日の条▽（四一五五頁）

△天治元年四月八日の条▽（二五七頁）

△天治元年六月十日 of 条▽（二七九頁）

△大治四年七月二十六日の条▽（二二五頁）

△永久元年三月二十八日の条▽（二一〇一頁）

△永久元年四月十八日の条▽（二一〇二頁）

△仁平二年正月十五日 of 条▽（二一五九頁）

其後故尼上雖得讓、不及知行令、中絶
向四条室町尼上御許、木工頭被出立

『台記』には、「あまうへ」が四九例、

申刻、参_ニ高陽院_一、依_ニ尼上召_一也

彼尼上、殊愛_ニ関白_一云々、関白尤可_レ被_レ行_ニ彼堂事_一
未刻許故尼上葬地、次詣_ニ断_一所_ニ晚景帰_ニ五条_一

『玉葉』には、「あまうへ」が一四例、

故殿若君、并其母尼上被_レ座所也

此日、渡_ニ住北尼上家_一所悩之間、可_レ易_レ所之由
天晴、仏敎聖人來、鳥羽尼上方、供_ニ養仏三体_一

「ははうへ」が三例、

入_ニ夜依_一召_ニ参_ニ女院御所_一、故法務母上参入_ニ彈_一箏

母上同相副、蘇芳単重、
紅袴不着_ニ物具_一、次余入_ニ簾中_一

母上相共令_レ著_ニ装束_一、余結_ニ腰_一、向_ニ生氣方_一、先例雖_レ無_レ所
見、以_ニ今案_一所_レ為也

北大文学部紀要

△仁安元年九月二十七日の条▽（三一・一五八頁）

△嘉応元年正月二十六日の条▽（四一・三〇八頁）

〔他二三例〕

△久安三年六月十一日の条▽（一一・二一四頁）

△久寿元年四月十三日の条▽（二一・一一一頁）

△久寿二年八月三十日の条▽（二一・一六七頁）

〔他四六例〕

△承安四年四月十四日の条▽（二一・三六六頁）

△治承元年八月二十一日の条▽（二一・九五頁）

△寿永二年七月二十二日の条▽（二一・五六七頁）

〔他一一例〕

△治承二年十月十日の条▽（二一・一〇八頁）

△治承四年七月十九日の条▽（二一・四二三頁）

△治承四年七月十九日の条▽（二一・四二三頁）

接尾語「うへ」の成立と展開

『古記』には、「あまうへ」が三例、

謁申尼上

次礼舎利、次向尼上許、戸部禪門養母也

次謁高野尼上、次見通定入道堂

『山槐記』には、「あまうへ」が三例認められる。

天陰、時々雨大理^忠時、母堂尼上被渡

故高松中納言^{実衡}、後家尼上入滅云々、年六十七

今夜高松尼上葬送云々、一郭内隔竹土葬云々

ここで注目されるのは、『中右記』『台記』に、それぞれ、約五〇例も「あまうへ」が使われていることと、[〃]母堂尼上[〃]、[〃]祖母尼上[〃]、[〃]母尼上[〃]の用例が存することである。しかし、この二点をもつて、後要素「うへ」の接尾語化の根拠とすることはできない。なぜなら、これらは、この期では、「事実の記録」としての「古記録」にのみ認められる傾向だからである。「古記録」が、表現性よりも「事実」を重視するとすれば、筆者の周辺に、何かと話題となることの多い、「仏門に入った女主」がいたり、動作主・被動作主などとして、頻繁に「尼上」と記録したのであるうし、また、「事実」を正確に誌す必要から、人物を特定する際には、就中、女性の場合、親族語彙によってより厳密に限定したと考えられるからである。

鎌倉前期初に成立した、『無名草子』『物語二百番歌合』、『説話文学』の『古事談』『発心集』『続古事談』に、「あまうへ」「あまうへ」「ははうへ」の用例が見える。

△承安四年七月十九日の条▽（二一五六頁）
△承安四年九月二十二日の条▽（二一六六頁）
△寿永二年六月十八日の条▽（二一三五頁）

△治承四年十月二十七日の条▽（三一三〇頁）
△治承四年十一月二日の条▽（三一三一頁）
△治承四年十一月三日の条▽（三一三一頁）

『無名草子』には、「あねうへ」が四例、

大将女一宮へまいりたまふをりあねうへ（改行）たえぬへきちきりにかへて

あねうへにはゝかりてこゝろよりほかなることこそあらめ

あねうへともなかくなりなとしてのちは又きこえにくゝおほしたるも

（八三頁）

（八六頁）

（八七頁）

〔他一例〕

『物語二百番歌合』には、「拾遺百番歌合」に、「あねうへ」が二例、

あねうへ（改行）たえぬべきちぎりそへてをしからぬいのちをけふにかぎりてしが

姉上一首

（六〇頁）

（一一〇頁）

「ははうへ」が一例、

ははうへかくれたまひぬときこえし時よりきたやまにこもりゐてつぎのとしの春

（六三頁）

『古事談』には、「あまうへ」が六例、

此安養尼上之許。強盜乱入。房中ニ有ケル物皆搜取出了

（第三「僧行」六二頁）

尼上之夢ニ。大明神開ニ宝殿戸。被レ仰云。我弥陀念仏ヲ好也

（第五「神社仏寺」九九頁）

退出之後。尼上云。此兄兒者。可レ至ニ大臣之人也。弟者凡卑也。

（第六「亭宅諸道」一二六頁）

〔他三例〕

「ははうへ」が一例、

暫アリテ入ニ母上御方ニ給之後。洞昭申云。此君本自无レ止御坐

（第六「亭宅諸道」一二五頁）

接尾語「うへ」の成立と展開

『発心集』には、「あまうへ」が一例、

母の尻上又いかにして命つぎ給はんずらんと、悲しく侍るなり

(第五・一八〇頁)

「ははうへ」が一例、

聞え給ふに、民部卿も母うへも涙をながしつゝ哀に思ひよせたり

(第六・二〇七頁)

『続古事談』には、「あまうへ」が一例存する。

四條坊門ノ別宮ヲバカノ尾上作レルナリ。女御ハラミ給ケル時

(第一「王道后宮」六三〇頁)

これらのうち、『無名草子』『物語二百首歌合』に「あねうへ」が認められること、『古事談』で「安養尼」が「あまうへ」の使用対象となっていること、『発心集』において「母の尼上」の用例が見えることが注目される。

まず、『無名草子』『物語二百番歌合』に用いられている「あねうへ」について検討しよう。国語辞書では、「あねうへ」に、「姉を敬つていう語」（『日本国語大辞典』）・『広辞林（第五版）』【用例ナシ】という語釈を施しているが、この二作品で「あねうへ」と呼ばれる人物は、「寢覚上」の姉であるところの「中納言北方」であり、一方、独身のまま、出家することもなく、若くして一生を終えた「宇治八宮大君」に対して、この二文獻では、「宮」「うちのあね宮」「宇治のあねみや」（以上『無名草子』）、「宇治のみこのひめ君」「宇治親王姫君」「あねの女君」「宇治宮の姫君」「女君」「宇治のみこひめぎみ」「あねぎみ」「姫君」「あねの姫君」（以上『物語二百番歌合』）と、「あねうへ」が用いられていないので、この期の「あねうへ」が単に「姉を敬つていう語」でないことは疑いない。「——うへ」形式で、あらたに成立したのが「あねうへ」であるということは、「ははぎたのかた」：「ははうへ」＝「おはぎたのかた」：「おはうへ」＝「あねぎたのかた」：「あばうへ」＝「あねぎたのかた」：「あばうへ」であるということは、「ははぎたのかた」：「ははうへ」＝「あねぎたのかた」：「あばうへ」であるということは、疑いない。

かた」=「ははうへ」:「おはうへ」:「う」という関係を満たすところの、「あねきたのかた」の類義語として「あねうへ」が生じたことであるから、少なくとも、成立当時、「あねうへ」が複合語であったことは確かである。そこで、これらの例が、成立当初のものか、成立時の意味・用法を維持していることが明らかになれば、鎌倉前期初の「あねうへ」は複合語ということになる。この二作品における、「あねうへ」の使用箇所の原資料たる『夜の寝覚』には、「あねうへ」が全く見えず、また前述した如く「おばうへ」より先に成立したとは考えにくく、管見の範囲では、これらの「あねうへ」の例が最古であることから、成立時に近いものであることは動くまい。実は、「定家自筆本」の『物語二百番歌合』には、同じ「中納言北方」に、「あねうへ」のほか、

ひろさはにひとりなかつてあねのうへもろともにおきふしなれにしかたを

〔拾遺百番歌合〕五五頁

と、「あねのうへ」という、同格的修飾語・被修飾語からなる連語形式——ゆえに、先に引いた、漢字表記の「姉上」は「あねのうへ」の可能性もある——も使われ、「あねうへ」「あねのうへ」と揺れているので、「あねうへ」が「あね」と「うへ」の同格的に結びついた複合語であることが確実なのであるが、「あねのうへ」という連語形式も初出であり、つまり、このことは、鎌倉前期初においては、説明的意図の有無にかかわらず、姉である女主と捉えて表現すること自体が新しい表現方法であったことを意味しているわけである。

次に、『古事談』において、「安養尼」に対して「あまうへ」が使われていることであるが、なにゆえ、このことが問題かという点、「安養尼」は、未婚のまま出家した女性だからである。「きたのかた」とは決して呼ばれることのなかった女性なのである。しかし、彼女は、安養寺の住持であるから、やはり「女主」なのである。これは、ともすれば、曖昧になりがちな、「うへ」と「きたのかた」との意味の相違を明確に示す例といえよう。

接尾語「うへ」の成立と展開

『発心集』は、『母の尼上』という連語形式が、和文系のものとしては、はじめて見える資料である。しかしながら、この連語形式が、本来『発心集』にあったものか非常に疑わしい。というのは、まず、『発心集』の成立時には「あねうへ」が複合語であったことが確実で、「あまうへ」も複合語と考えられるからである。前述したように、この期に成立した、複合語の「あねうへ」は、「あまうへ」がその一語である「——うへ」形式の類推によって成立しているし、「あねうへ」「あねのうへ」の用例のある『物語二百番歌合』（定家自筆本）の推定書写年代（寛喜三年頃⁽⁴⁾）は、『発心集』の成立年代より二〇年程後なのである。また、その『物語二百番歌合』（定家自筆本）において、原資料の『浜松中納言物語』では「あまうへ」と呼ばれることのある「吉野尼君」に、

はゝのあま君身まかりけるのち

よしのゝひめ君

（『拾遺百番歌合』七三頁）

と、同格的な修飾語をとるとき、「あまうへ」でなく、「あまぎみ」が用いられているのである。さらに、年齢的には、『発心集』の著者の長明の方が、定家より七・八歳年上だから、むしろ、語の使用に関しては、長明の方が保守的と考えられるのである。そのうえ、『発心集』に、『母の尼上』の用例が見える、同じ説話に、

母の尼公さきぐにかはれる事もなければ、我が子のうせたともしらずして

（第五・一八一頁）

良久しくありて後送りたるに、母の尼公云ふやう

（第五・一八一頁）

と、『母の尼公』という連語形式が二例も存するのである。これらのことから、現存の『発心集』に見える『母の尼上』の例は、『母の尼公』の誤写と考えたい。

したがって、鎌倉前期初における「——うへ」形式は複合語と考えられる。

なお、この期の『古記録』には、『三長記』に、「あまうへ」が三例、

殿下有仰、々其由了、今日醍醐尼上御入滅

向嵯峨、謁申尼上、又謁任雅法眼

入夜退出、●梅小路謁尼上^{向カ}

『明月記』には、「あまうへ」が五八例存する。

出向六条尼上御許、謁申之後參八条殿

入夜俄絶入之間、家人等相具車奉迎尼上

興心房被來之次受戒、故尼上忌日也

これらは、いずれも、特に問題となるものはない。

『風葉和歌集』（一二七一年）の成立以前を鎌倉前期とすると、鎌倉前期初以降の鎌倉前期成立の、『承久記』（流布本）、『説話文学』の『十訓抄』『古今著聞集』『世継物語』（あるいは後期初）、『擬古物語』の『住吉物語』『あさぢが露』『むぐらの宿』『石清水物語』『苔の衣』『いはでしのぶ物語』『我身にたどる姫君』『しのびね物語』『風につれなき物語』には、「あまうへ」「うばうへ」「ははうへ」の用例が見える。

『承久記』（流布本）には、「あまうへ」が二例、⁵⁾

一ヲバ屋部ノ尼上ニ奉ル、一ヲバ太秦ノ女房ニ伝ヘ給ヘ、六ヲバ六人ノ子供ニ

尼上、餘ニ無慙ナレバ助ケント思フゾ。其代リニハ尼ガ首ヲ取ト宣ケレバ

『十訓抄』には、「あまうへ」が三例、

△建久七年十一月二日の条▽（七三頁）

△建永元年九月五日の条▽（二四五頁）

△建永元年九月二十三日の条▽（二五二頁）

△建久九年二月二十四日の条▽（第一一七〇頁）

△建暦二年七月十五日の条▽（第二一一六八頁）

△寛喜元年十二月二十四日の条▽（第三一一五〇頁）

〔他五五例〕

（下・七三頁）

（下・九〇頁）

接尾語「うへ」の成立と展開

尼上、紙のふすまと云物ばかりを引きてゐられたりけるに

(第六「可_レ存_二忠信・廉直旨_一事」一八四頁)

姉なる尼のもとに、小尼上とて有けるが、走まいりてみれば

(第六「可_レ存_二忠信・廉直旨_一事」一八四頁)

もて来たりければ、尼上、それものちは、我物とこそ

(第六「可_レ存_二忠信・廉直旨_一事」一八四頁)

『古今著聞集』には、「あまうへ」が二例、

あまうへは、紙ぶすまといふ物ばかり負_をひきて居られたりけるに

(卷一二・三五八頁)

尼うへのいはれけるは、これもとりて後は、わが物とこそおもひつらめ

(卷一二・三五九頁)

『世継物語』には、「ははうへ」が二例、

時の殿のはゝ上に門寺といふてらにおはしけるを聞て。又の日をの殿に人いとおほく

(一五四頁)

うたの院位につかせ給て。けふまでその御たうにおはします。母上はきさきにならせ給ても

(一六八頁)

『住吉物語』(明日香井家本)には、「あまうへ」が一例、

すみの江と申所にこそあまうへとて京の人おはしませと申ければそれをするへにて

(二二〇頁)

『あさぢが露』には、「あまうへ」が五例、

たゝあまうへのいき給たらんかきりはてあしともなりめあかしともして

(二〇九頁)

これは一てうのみやもやけにしかはあまうゑうせ給てのちよるへなくて

(一一五頁)

あま上もうつくしき物まうけたりとよるこひたまふ事かきりなし

(一三二頁)

「ははうへ」が二例、

〔他二例〕

思ひあまりはゝうへにもうれへきこゑ給へはをとゝもきゝ給て

(二〇頁)

はゝ上大とのなともせいしきこゑ給へともみたうにことつけてかよひありき給事

(一二三頁)

『むくらの宿』には、「あまうへ」が一例、

おほはらのあまうへのまいりたるに、とのゝ御ものゝく御しやうすくなと

(二五七頁)

「ははうへ」が七例、

母上の物いひこそうかりしか、つらかりし事やほありしとおほしいつるに

(二三九頁)

はゝうへ、よしなきなをなかし、ひめ君さてやみぬ、まれ／＼よき人めかしかりつるには

(二四九頁)

たゝはゝうえの、あなかちににくみ給しはかりこそ、かゝるふるまひあるへしとやは

(二五七頁)

〔他四例〕

『石清水物語』には、「あまうへ」が二六例、

そゝのかすめれはあまうへにきこえよ、こゝにはきくへきもなしとのたまふ

(巻上・二六七頁)

あまうへかたへとおほしくて、いつるにちかひて、丁のかたひらひきあけて入給て

(巻上・二六七頁)

我はあまうへにつけたてまつらんと思ひて、いつれはいかなるせきもりをすへ給とて

(巻上・二六八頁)

〔他二三例〕

「ははうへ」が一例、

ははうへも心やすくおほし、女の御かたさまにもかひありとよろこひたり

(巻上・二五四頁)

『昔の衣』には、「あまうへ」が二例、

接尾語「うへ」の成立と展開

いとゞあまうへも、心ほそくおぼしいりたるを、左衛門のかみさい将などぞ

(卷一・上―四一頁)

わすれ草おふるならひにてのみあるに、ふるさとのあまうへぞつきせずおぼしいりたる

(卷一・上―四二頁)

「ははうへ」が一九例、

かへり給ひてはどなく御ふみあるにぞ、はうへむねおちいて御心ゆきたる⁽⁹⁾

(卷一・上―五三頁)

御返しは、やがてはうへぞかき給ふ

(卷一・上―五三頁)

またなくあつかひかしづききこえ給ひしかば、はうへもこればかりは心やすく覺したりき(卷一上―六四頁)

〔他一六例〕

『いはでしのぶ物語』には、「ははうへ」が九例、

心ぐるしき事にさへ思ひ聞え給ふさま、母うへの御心ざしにはやゝこえてぞ見ゆる

(卷一・一四六頁)

おもひしりたる気色もなう、母うへよりもへだてなげにのみ思ひきこゑ給へるに

(卷一・一四九頁)

よは／＼しうさへ見へたまひしに、なべての心のやみにも過たるおとゞ・母うへの御心

(卷一・一五五頁)

〔他六例〕

『我身にたどる姫君』には、「あまうへ」が二六例、

あまうへの御をきての、あはれにたのもしきにも、いづれをなにとわかむにしも

(卷一・二一七頁)

あまうへも、はずかしきあたりを、よいなくとわび給

(卷一・二二〇頁)

かたはらいたき御程なれば、あまうへぞ、ずゝひきならしてゐざりいで給ふ

(卷一・二二二頁)

〔他二三例〕

「うばうへ」が一例、

むかしのうばうへの御心にや、いさゝかもまさなき御うらみなど

(卷四・二九九頁)

「ははうへ」が四例、

ありがたうてのみすぐし給ふを、おとゝ・はうへは、これをさへなげき給ふ

(卷一・二二三頁)

しづまりおはすれど、この中將のはうへも、わざとすぐれたる御おぼえにも

(卷一・二二七頁)

はうへは、もとより君だちの御うへなど、はか／＼しうのたまひうしろむ御心も

(卷五・三三八頁)

『しのびね物語』には、「あまうへ」が一〇例、

尼上はいとおもひかけぬことにもあるかな、さてもたれとしらぬ人に

(三八〇頁)

あまうへにたゞくらき程のまきれにたいめん給はらんと、せちにのかるへくもあらず

(三八〇頁)

あまうへ出給ひて、かはかり御ころをとゝめ給ふへき人にもおはせず

(三八二頁)

「うばうへ」が一例、

うはうへも中／＼なるおもひのまさるへきなめりとて、声を立てなき給ふ

(三九五頁)

「ははうへ」が一九例、

はうへへの御せうそくありなとすれば、わつらはしくて、さしはなたせ給ふ御けしきの

(三八一頁)

はうへの御まくらまいり給へは、うちみあけ給ひて、なと比ほとはやせ給へる

(三九〇頁)

接尾語「うへ」の成立と展開

あふきにてまきはし給ふ御さまを、はうへまことにあはれにおほす

(三九〇頁)

〔他一六例〕

『風につれなき物語』には、「ははうへ」が一四例存する。

はうへはましていよく世中を我まゝにおしたち給へり

(六〇六頁)

ぎしきめでたきにつけてもおとやはうへへの御ことをつきせずおぼしいづ

(六一六頁)

御なみだなくさまれたまひける姫君ははうへへの御事はものおぼえてすぎ給けるに

(六三一頁)

〔他一一例〕

ここでは、『十訓抄』の「小尼上」、『世継物語』の「母上」、『我身にたどる姫君』『しのびね物語』の「うばうへ」を取りあげたい。

まず、『十訓抄』の「小尼上」について検討しよう。これまで、「——うへ」形式は、「女主」に対してのみ用いられていたのに、文脈から明らかなように、「小尼上」で指示される人物は「女主」ではないのである。それで、後要素「うへ」が意味変化を起こしたのか否かを考えてみる必要があるが生じてくるのである。ところで、この用例が見える説話は、『古事談』所収の説話に依拠しているのであるが、『古事談』では、

小尼公安養尼
婦尼也 走廻テ見ケレバ。カレ色ノ小袖ヲ一落タリケルヲ取テ

(第三「僧行」六二頁)

と、「小尼公」だし、また、『十訓抄』のこの説話をそのまま再録した『古今著聞集』では、

姉なるあまのもとに、小尼公とてありけるが、はしりまいりてみければ

(卷一二・三五八頁)

と、やはり「小尼公」である。しかも、『十訓抄』には、古写本が存しない由であるから、現存の『十訓抄』に見える

“小尼上”は“小尼公”の誤写と思われる。

次に、『世継物語』の“母上”についてであるが、この例の使用対象が「宇多天皇母」であることが注目される。本来、「うへ」と「きさき」とは意味的に重なることがないからである。しかし、「宇多天皇父」、すなわち「光孝天皇」は、親王時代が長かったので、説話の筆者からすれば、「宇多天皇母」は「ははうへ」と呼ばれた人物なのである。したがって、「光孝天皇」の即位は、「宇多天皇母」自身にとっては、「うへ」から「きさき」への変化だし、「宇多天皇」（ただし、彼自身はその時皇子であるが）にとっては、「ははうへ」から「ははきさき」への変化として、説話の筆者には捉えられるのである。つまり、「母上はきさきにならせ給ても」という句は、「光孝天皇」の即位による、「宇多天皇母」の変化を視点の移動（「宇多天皇」から「宇多天皇母」へ）を絡ませて表現したものである。

『我身にたどる姫君』『しのびね物語』には、ともに一例ではあるが、「うばうへ」の用例が存する。「うばうへ」は、「あねうへ」について成立した、新たな「——うへ」形式の語である。しかし、「うばうへ」の成立は、「おばうへ」や「あねうへ」の成立が、それぞれ、その期における「——うへ」形式の複合語性の有力なよりどころになるのとは異なり、「——うへ」形式の複合語性を積極的に支持しない。「うばうへ」は「おばうへ」の転じたものだからである。「うばうへ」と「おばうへ」とは、「うば」と「おば」との関係に還元できるから、これらの「うばうへ」が成立当初の例だからといっても、これらの「うばうへ」の存在は、「——うへ」形式が複合語であることの根拠にならないのである。要するに、この期の「——うへ」形式が複合語であると断定しうる論拠はないのであるが、中古後期から鎌倉前期初までの「——うへ」形式と比べて、用法上の相違が見出し難いし、前述した『物語二百番歌合』（定家自筆本）の書写年代が寛喜三年（一二三一年）頃と考えられることより推して、鎌倉前期初以降の鎌倉前期の「——うへ」形式も複

接尾語「うへ」の成立と展開

合語と認めてよからう。

なお、この期の「古記録」では、『平戸記』に、「あまうへ」が六例、

先謁申御乳母尼上言談、次出御、数刻入見参

尼督三位局不慮参会、仍被謁、此尼上、後鳥羽院御在位人也

尼上云、自所々有夢想之記文、取出被見之

△寛元二年二月三日の条▽（二二六五頁）

△寛元二年三月十二日の条▽（二二七七頁）

△寛元三年十二月二十日の条▽（三二四七頁）

〔他三例〕

『吾妻鏡（前半）』には、「あまうへ」が四例存するが、特に問題はない。

〔二〕入_レ海人々（改行）二位尼上

右。犬丸。菊松地頭。

字美濃 高田郷地頭保房。等。如_二私領_一知行。

紀伊国 湯橋（改行）以_二消息_一。下_二知熊野尼上_一。

△文治元年四月十一日の条▽（二四五頁）

△建久元年四月十八日の条▽（三七八頁）

△建久元年四月十九日の条▽（三八二頁）

〔他一例〕

院政期から鎌倉前期までの、後要素「うへ」、「あねうへ」「あまうへ」「うばうへ」「ははうへ」の意味をまとめると次のようになる。

後要素「うへ」……△女主の敬意的把握▽

「あねうへ」……△姉である女主の敬意的把握▽

「あまうへ」……△尼である女主の敬意的把握▽

「うばうへ」……△祖母である女主の敬意的把握▽

「ははうへ」……／＼母である女主の敬意的把握▽

次に、鎌倉後期成立の、『沙石集』や（詞章の成立が鎌倉後期に遡りうる）『平家物語』（覚一本）、「擬古物語」の『かぜに紅葉』『恋路ゆかしき大将』『小夜衣』『八重葎』『木幡の時雨』『白露物語』には、「あねうへ」「あまうへ」「うばうへ」「ははうへ」の使用例が見える。

『沙石集』には、「あまうへ」が一例、

木末ナル栗ノゴトクニ身ヲナシテ（改行）イザ尼ウヘニヲチカ、リナム

（巻五末・二三八頁）

『平家物語』（覚一本）には、「ははうへ」が二三例、

御二条ごでうの関白殿、おもき御病をうけさせ給しかば、母うへ、大殿おほとの北の政所まんどころ、大になげかせ給つゝ

（巻一・上―一三〇頁）

母うへは御立願ごりえんの事人にかたらせ給はねば、誰もらしつらむと

（巻一・上―一三二頁）

少将せうしょうをはじめ奉て、母上ははうへめとの女房にようぼう、其座そのざになみゐたる人々、心あるも心なきも

（巻二・上―一八四頁）

〔他二〇例〕

『かぜに紅葉』には、「あまうへ」が二例、

あまうへとこそねしかと、そのゝちはひとりこそ、かほのよからぬ人とは

（巻一・一六六頁）

いかにしてひむかし山のあまうへのもとへゆかんと、仏神をねんしい給へるに

（巻二・一九一頁）

「ははうへ」が五例、

接尾語「うへ」の成立と展開

物をのみ思ひよはり給へるはうへは、ましてなけきにたへぬあまりにや

御心せはくて、中納言とのも、はうへも、そのなけきにたへすうせ給にけり

女御のはうへ、うせさせ給てのち、むかへきこへさせ給て、ひめ宮ひとつに

『恋路ゆかしき大将』には、「あねうへ」が四例、

なげかしうおぼしたるも、あねうへの御心ざしのせちになるゆへにこそあらめ

まことにあねうへにはをよび給はざりけるすさまじさを、あやしと人の思はんも

ひきうごかしきこえ給を、あねうへはのどやかな御ほんじやうにて

「あまうへ」が一三例、

あま上をも、女御の御あたりには、ことにちかづけじともてなさせ給なりけり

あまうへに、御まいりの程の事、御もぎのぎしき・ありさまなど

はゝのあま上も、女御の御さまはめてたけれど、あさはかなる身にはなに事も

「ははうへ」が二例、

わが御うへのまゝはうへ、春宮の宮す所の御はゝ、はなやかに色めかしき人にて

はつあきのころ、こなたのはうへもわたり給へるおり、ひまもとめてみ給へば

(巻一・一四四頁)

(巻一・一六六頁)

(巻二・一八七頁)

〔他二例〕

(巻一・四四四頁)

(巻二・四五九頁)

(巻三・四七六頁)

〔他一例〕

(巻四・四九三頁)

(巻四・四九三頁)

(巻五・三三四頁)

〔他一〇例〕

(巻一・四三八頁)

(巻一・四四二頁)

『小夜衣』には、「あまうへ」が六〇例、

かたくやとおもひながら、あまうへにきこへさふらいてこそと申ければ

あまうへもうちなきて、おひのしるしには、見し人もこひしく

あまうへも、姫君の御めのとにきこへあわせたもふ、かくめてたき御ありさまを

「うばうへ」が二例、

うはうへのこひしくおほさるゝにやと、いたわしくおほしめして

五大納言とのもそのゝち心にかゝりて、うはうへいかなけきたもふらん

「ははうへ」が一二例、

母うへおさなくてうせにければ、としおひたるうはのもとへ

はゝうへ、(改行)身のうさのおもひしらるゝあかつきはとりのねもとに

はゝうゑの御めのとも、おなしく世をそむきていたりけるも、此姫君を

『八重葎』には、「ははうへ」が三例、

はゝうへは、こかうづけの宮のうへの御いもうと也

ましてはゝうへは、たゞ此事のみよるもひるもなげかせ給ひて、御みづからも人づてにても

二月の十日ごろより、はゝうへ御むねをやみ給ひて、くるしがり給ふ

(卷上・四三〇頁)

(卷上・四三〇頁)

(卷上・四三一頁)

〔他五七例〕

(卷中・四六五頁)

(卷中・四九二頁)

(卷上・四二九頁)

(卷上・四四八頁)

(卷中・四六四頁)

〔他九例〕

(五五頁)

(五六頁)

(九一頁)

接尾語「うへ」の成立と展開

『木幡の時雨』には、「あまうへ」が九例、

あまうへ見たてまつりてあなうつくしきはかりちゝ君のかならすぎさきとのみ

(八一頁)

あまうへにたにしらせたてまつらてやかてわたしきこえつるなり

(九三頁)

おもひわひし少将殿みやこにとゝまりあはれとし給ひしあまうへはむねをわつらひてうせ給ぬ

(一一四頁)

「ははうへ」が二一例、

〔他六例〕

母うへの御心のつらきにつけてもかゝる御こといきおはしませと念しつるしにや

(八五頁)

いとゝはゝうへは御いのりせさせ給ふそ心くるしきや

(九八頁)

うちそひ奉るへきを母うへのおはするつゝましさにこそなどの給ふほとにその御けしきと

(一一一頁)

〔他一八例〕

『白露物語』には、「ははうへ」が三例見える。

おほいぎみ、わたらせ給へ。母うへのもとめさせ給へるなど聞ゆれば

(三六八頁)

故母うへのおはせましかばなど、忍びやかに語ひぬるに、物思しみだるゝ

(三七七頁)

故母うへのおはせし程よりまかで散で、たへさぶらう老たるごだちなど四五人

(三八二頁)

このなかで、まず問題なのは、『恋路ゆかしき大将』の「ままははうへ」の用例である。中古後期や院政期には、「継母である女主」を「まま」「はは」「うへ」を用いて表現する場合、

いとをしかりぬべけれど、継母まははの上の、思おもひいたりふかくかしづき

〔『夜の寝覚』卷四・二八〇頁〕

まゝはゝのうゑの御ゆかりにはなれさりける人とかや時／＼ほのめき給なれと（『在明の別』卷二・四六一頁）

と、「はは」と「うへ」との間に「の」が介在する、「ままははのうへ」という連語形式が使われているのである。^⑥中古後期や院政期の「——うへ」形式は、前要素と後要素の「うへ」とが同格的に結合していると解されるわけであるが、同様にして、前要素の「はは」に同格的に結びつくことができる、「きたのかた」「みや」が、それぞれ、「ままはは」と結合する際にも、

ねたけなる事おほくてまゝはゝのきたのかたはやすからすおほすへし（『源氏物語』「賢木」三四七頁）

御継母^{まはは}の北^{きた}の方^{かた}のいかにし給つるにかとまで、世人申思^{おも}へり（『栄花物語』卷二・上―九三頁）

ひきあげ給へるにまゝはゝの宮の御てなめりとみゆれば（『源氏物語』「宿木」一七二七頁）

まゝはゝの宮の御事、いさゝかもをろかにつかふまつり給はねど（『我身にたどる姫君』卷四・二九二頁）

と、「ままははのきたのかた」「ままははのみや」という連語形式をとるのである。このように、「継母である妻」（または「継母である宮」）を「まま」「はは」「きたのかた」（または「まま」「はは」「みや」）を用いて表現する場合、「の」「はは」、「はは」と「きたのかた」（または「はは」と「みや」）との結合の強さに差があり、「はは」と「きたのかた」（または「はは」と「みや」）の結合にくらべて、「まま」と「はは」の結合の方がかたいために、結合のゆるやかな、「はは」と「きたのかた」（または「はは」と「みや」）の間に切れ目が生じることにもとづく。「まま」と強固に結合した「はは」に、「きたのかた」（または「はは」と「みや」）は「の」を介することによって間接的に結びつくのである。したがって、「ままははうへ」という合成形式の成立は、「ははうへ」における、「はは」と「うへ」の結合が、同格的な比

接尾語「うへ」の成立と展開

較的ゆるやかな結合から、「ままはは」における、「まま」と「はは」の結合にほぼ匹敵するかたいものになったことを意味する。そこで、「ははうへ」における、「はは」と「うへ」がいかなる関係で結合しているかを知るには、「ままはは」における、「まま」と「はは」の結合の強さの原因を明らかにする必要がある。第一に考えられるのは、「ままはは」における、「まま」と「はは」が、前者が接辞で、後者が語基という関係にあることであるが、その点に着目すれば、「ははうへ」においても、「はは」と「うへ」が、それぞれ、語基・接辞になったとする解釈が導き出される。なるほど、接辞は、意味の実現を語基に依存しており、そういう観点に立てば、接辞と語基とは密接な関係にあるわけである。しかし、むしろ一般には接辞と語基との結合はゆるやかである。例えば、「お（ほ）ん」「はは」「うへ」が結合する場合、既にみてきたように、中古以来、「お（ほ）んははのうへ」とならず、「お（ほ）んははうへ」という合成形式をとるのである。「お（ほ）ん」「はは」「きたのかた」（または「お（ほ）ん」「はは」「みや」）の結合も同様に、

女院の御母きたのかたの御はらのきんだち三所の御ありさま、申侍らん

齋院は、女御の御は^{いま}宮の今は^{きは}の際まで、あはれなりし御消息^{せうし}なども

『狭衣物語』巻四・三五二頁

『大鏡』巻四・一七五頁

と、連語形式をとらないのである。同じく接頭語でありながら、このように語基との結合の強さに差がある以上、「はは」「うへ」が、単に語基・接辞の関係にあるということでは不十分である。それでは、「まま」と「はは」の結合が、「お（ほ）ん」と「はは」の結合に比べてはるかにかたいのはなぜであろうか。この両者の結合の強さの違いは、結びつきうる語基の種類の多少とかかわっている。すなわち、「お（ほ）ん」「まま」は、ともに語基に意味の実現を依存しているといっても、「お（ほ）ん」は種々の語を語基としうるために、「接合の意味特徴」はかなり抽象的で、個々の語基との意味の共通性が低く、それで「はは」との結びつきが弱いのに対して、「まま」は親子関係を示す語のみを語基

とするから、「接合的意味特徴」は具象的で、個々の語基との意味の共通性が高く、「はは」との結びつきが強いのである。ゆえに、「まま」が「はは」に強く結びついていることが、「まま」が特定の語しか語基としないことによるとすれば、「うへ」が「はは」と強く結合するようになったことも、「うへ」が少数の語だけを語基とする接辞となったからだということになる。この推論の妥当性は、「——うへ」形式における前要素が、『恋路ゆかしき大将』において、「あね」「あま」「はは」、鎌倉後期の範囲でみても、「あね」「あま」「うば」「はは」に限られることから、確かめられる。なお、『かぜに紅葉』には、

ひたをもてにて、まゝはゝのうへとも、いつとなう一にのみたはふれきこゑ給程に

(巻一・一五二頁)

と、「ままははのうへ」の形式があるから、後要素「うへ」の接尾語化は鎌倉後期に起こったと考えられる。

また、『恋路ゆかしき大将』には、「あまうへ」が、同格的な(連体)修飾語を伴った「はゝのあま上」の用例が存する。この形式は、「あま」と「うへ」とが同格的に結びついていたときには、本来あり得ない破格の連語であり、この形式の確立は、後要素「うへ」の接尾語化、つまり、意義上の重点が前要素に移ったことを意味している。

さらに、『平家物語』(寛一本)の「ははうへ」の、最初にあげた例も後要素「うへ」の接尾語化を示すものと思われる。『平家物語』は、諸本間で詞章の出入りが激しく、「ははうへ」の用例数や文脈も一定していないが、この例は、鎌倉後期の成立と見られる「延慶本」にも、

後二条関白殿(中略)重キ勞ヲ受サセ給フ母上大殿ノ北ノ政所斜メナラス御敷有テ (第一本・一一四七頁)

とある。この文の、「母うへ」「大殿の北の政所」(または、「母上」「大殿ノ北ノ政所」)は、場面上、同一人物と考えられるし、前述したように、通常の文においては、親族語彙が同格的な関係に立つ成分を構成する際に、先行成分

接尾語「うへ」の成立と展開

となるという条件をも満たしている。ところが、「きたのまんどころ」は、そもそも「撰閑家の女主」に対して用いる尊敬表現であるから、「ははうへ」の後要素の「うへ」が△女主の敬意的把握／であるならば、意味的にかなり重複することになり、「人物規定文」のような特殊な文はともかく、この場合、極めて不自然である。この不都合は、「ははうへ」の「うへ」が接尾語化していて、意義上の重点が「はは」にあると考えることによってのみ解消されるのである。

そのほか、『小夜衣』において、「あまうへ」が頻繁に使われていることも、後要素「うへ」の接尾語化に起因しているよう。鎌倉前期までで、和文系の作品中、「――うへ」形式の用例が最も多かったのは、それぞれ、「あねうへ」の四例（『無名草子』）、「あまうへ」の三五例（『栄花物語（正篇）』）、「うばうへ」の一例（『しのびね物語』など）、「おばうへ」の二例（『栄花物語（続篇）』）、「ははうへ」の二〇例（『浜松中納言物語』）であるが、『小夜衣』の「あまうへ」は六〇例とはるかに多く、しかも、『栄花物語（正篇）』とは異なり、その総てが同じ人物（左衛門督妻）に対して用いられ、また、『浜松中納言物語』で「ははうへ」の用例の集中している人物が「うへ」と呼ばれることが多いのとも違い、その人物に独立用法の「うへ」が一例も使われていないのは、後要素「うへ」が敬称の接尾語化したためであると解するのが自然である。

かくの如く、鎌倉後期には、後要素「うへ」が接尾語化していたと思われるわけであるが、使用対象は、なお前代と同様に「女主」である。単なる敬称の接尾語として使われていた徴証は認められない。すなわち、接尾語「うへ」の「対象の意味特徴」は△女主／ということになる。また、例えば、「あまぎみ」が「あま」で指される人物に直接向けられた尊敬表現であるのに対して、「あまうへ」は、「尼」なる人物が（△女主）という上位者であることに基づく尊敬表現であるから、「うへ」の「基礎の意味特徴」は△上位者としての敬意／である。そして、「接合の意味特徴」

は、△母・祖母・姉・尼の一般的把握△ということになる。そこで、鎌倉後期における、接尾語「うへ」、「うへ」を後要素にもつ「あねうへ」「あまうへ」「うばうへ」「ははうへ」の意味をまとめると次のようになる。

接尾語「うへ」

1 自律的意味特徴

① 基礎的意味特徴……△上位者としての敬意▽

② 対象的意味特徴……△女主▽

2 接合的意味特徴……△母・祖母・姉・尼の一般的把握▽

「あねうへ」……△女主という上位者としての姉の敬意的把握▽

「あまうへ」……△女主という上位者としての尼の敬意的把握▽

「うばうへ」……△女主という上位者としての祖母の敬意的把握▽

「ははうへ」……△女主という上位者としての母の敬意的把握▽

ところで、鎌倉後期に後要素「うへ」が接尾語化したのはなぜであろうか。鎌倉前期までの、「——うへ」形式の変遷は、意義上の重点の移動、言い換えれば、前要素と後要素との意義関係の変化がきっかけとなっていた。前要素と後要素とが意義的にはば対等になったことが契機となり、「——きたのかた」形式との対をなすべく、漸次その種類を増したと捉えることができた。「おばうへ」（ゆえに間接には「うばうへ」「あねうへ」の成立は、「——きたのかた」の類推による、「——うへ」形式の増補の完了を意味するわけであるが、このことは、同時に、前要素の種類が殆ど一致することで、

接尾語「うへ」の成立と展開

「うへ」と「きたのかた」との類義性を一層強めたのである。それは、『平家物語』（寛一本）や『小夜衣』に、話し手の属する世界の「女主」に対して、

北方は其御敷と申、是の御事と申、一かたならぬ御思に

（巻三・上―二三七頁）

いまおもふにはなにしに北のかたにきこへけん、人めはかりはよりしものを

（巻下・五〇四頁）

と、前代までとは異なり、「きたのかた」が用いられていることによって確かめられる。しかも、この二作品には、単独用法の「うへ」が非常に少なく、「きたのかた」が、△妻▽のほかに△女主▽の意味をもつようになった――「きたのかた」が△女主▽の意味を獲得したことが、△妻▽の意味から変化して△妻▽の意味を失ったことでないことは、ついに「あまきたのかた」という形式が生じなかったことから明らかである――ことは、単独用法の「うへ」の衰退を招いたと思われる。独立用法の「きたのかた」「うへ」のこのような状態は、後要素間の用法上にも影響し、△――である女主の敬意的把握▽の表現として可能な「――うへ」「――きたのかた」の二形式のうち、意味範囲の広い「――きたのかた」形式が残り、「――うへ」形式は、△女主▽を「対象の意味特徴」として保ちつつ、派生語化することで、死語となることを免れたと解される。そして、「あまうへ」は、他の「――うへ」形式との連想関係から同じく派生語化したと考えられる。

室町時代に入ると、「――うへ」形式は、次第に「ははうへ」専用となる。室町前期成立の、『増鏡』や『仮名文字遣』（文明十年本系）に、「あねうへ」「あまうへ」が存するが、他の資料からは、今のところ、「ははうへ」以外の「――うへ」形式が見い出せない。

『増鏡』には、「あまうへ」が一例、

父の大納言、母の尼上あまうへなど歎きつきせず、胸あかぬ心ちしけり

(卷一七・四八七頁)

『仮名文字遣』(文明十年本系)に、「あねうへ」「あまうへ」が、各一例見える。

あねうへあまうへ 姉上あまうへ尼上

(「文禄四年本」〔へ部〕二八二頁)

『増鏡』では、「あまうへ」が、「母の尼上」というように、同格的な(連体)修飾語をとっている。前述した如く、「——うへ」形式の後要素「うへ」は、鎌倉後期に接尾語化しているので、問題はない。『仮名文字遣』の用例としてあげた、「あねうへ」「あまうへ」は、『語学叢書 第一篇』(赤堀又次郎校訂・明治三四年・東洋社)によれば、「文明十年本」(現在所在不明)には存するようであるが、別系統の「文明十一年本」などにはとられておらず、「あねうへ」「あまうへ」は室町中期に増補されたものと解すべきかもしれない。

いずれにしても、室町時代には、「ははうへ」が、前期成立の『曾我物語』に、

後うしろはいかにおもひければ、いそぎ母上ははうへにぞかたりける

(卷三・一三四頁)

母上ははうへ、大きにおどろき、かれらを一間所まどによびければ、箱王はなぢいををらざるに

(卷三・一三四頁)

とあり、『太平記』にも、

母上ハハウヘ流ル、泪ナミダヲ押オサヘテ、此河コノカハ是極楽浄土コレゴラクジャウドノ八功德池ハツクドクヂトテ

(卷一一・一一三八〇頁)

母上ハハウヘノタバナラザリシ時トキ節限フシカリザナキ物思オモヒニ沈給シヅミフ故ニヤ、生ウマレ落玉オチヒシ後

(卷一三・二二二八頁)

母上イデアヒ出合デアヒテ、只今俄コトナニ心地コトチノ例ナラヌ事侍ハツベレバ、後ノチノタベヲコソ

(卷一五・二二二〇頁)

など見え、室町中期の「謡曲」にも、

接尾語「うへ」の成立と展開

嘆き給はん母上の、おん心のうち、思ひ遣られていたはしや

時致は母上に、添ひ申したると思しめせ、今まではその主を、守り仏の観世音

母上われを尋ね給ひて、かやうに狂ひ出で給ふとは、夢にもわれは知らぬなり

のようにあり、室町後期末までに成った「物語草子」にも、

はうへなかるゝなみたをおしとめてそはなるてはこをとりいたし

はうへのおほせられしは身つからをきよみつのくわんおん多申子に

しばしの暇を多させよ、母上におくれ奉りて後、毎日御きやう読奉る

など見えるが、他の「——うへ」形式は未見である。少なくとも、後期には「ははうへ」が孤立していたことは確実に

ある。派生語となった「——うへ」形式が、「をばうへ（伯母上・叔母上）」「いもうとうへ」などというようには種類

を増さずに、反対に、「あねうへ」「あまうへ」「うばうへ」が廃れたことは、一見奇妙であるが、これは、「うへ」の接

尾語化に伴う、必然的な現象である。「——うへ」形式における、意義上の重点が前要素に移ったことで、この形式で

は、△姉▽・△尼▽・△祖母▽・△母▽本位に後要素との意味的適合性が問題となるようになったのである。そもそ

も、「尼」は「女主」ではないほうがはるかに多いし、また「姉」や「祖母」が「女主」である世界に基準となる人物

が直属するのは、「母」の場合とは違い、かなり特殊である。それゆえ、「——うへ」形式は、「姉」「尼」「祖母」の尊

敬表現としては使いにくいものとなり、やがて廃れてしまったのだと思われる。

「ははうへ」の孤立状態が後期末まで続いていたことは、ロドリゲス『日本大文典』の次の記述によっても明らかである。

〔春栄〕三七八頁

〔夜討曾我〕一〇四頁

〔三井寺〕三九一頁

〔鐸かづき〕五一頁

〔千しゆ女〕二五〇頁

〔いわやひめ〕二一八頁

Vye (上)。女に使ふ。Faua vye (母上)。Voye (御上)。

〔助辭に就つて〕三〇三頁

○女について話すのに尊敬の助辭として使ひ、尊敬する人の名の後に添へる。例へば、Faua vye (母上)。母様の意。Voye (御上) は主婦とか Tono (殿) の夫人とかをいふ。

〔名詞に接続する尊敬の助辭に就いて〕五七三頁

ロドリゲスは、接尾語「うへ」の例として、二箇所とも「ははうへ」「おうへ」をあげている。しかしながら、「おうへ」は「うへ」に接頭語の「お」が付いた語であるから、ロドリゲスの言う、「尊敬する人の名の後に添へる」「うへ」には該当しないのである。にもかかわらず、接尾語「うへ」の例として、「ははうへ」のほかに、適當でない「おうへ」をあげざるをえなかったところに、「ははうへ」の孤立状態を認めることができるのである。事実、室町後期末成立の『日葡辞書』には、「——うへ」形式として、

Faua vye. *Māy, fallando com honra, com reuerencia.* (尊敬し、敬意をもって言われるところの母。)

「ははうへ」しか掲載されておらず、これら以外の「キリシタン資料」にも、

vonfaauvye ua tçuneno vonsumidocoro cacayaite itçucuxiqi uo (『サントスの御作業』巻第一・九六頁)

faua vye, menoto no nhôbô sono za ni nani ita fodo no fito ua (『天草版平家物語』五八頁)

vôfaua vyeua vôcanaximino amarini vôcocomoro qiyé (『スピリツアル修行』一七八頁)

などと、「ははうへ」は存するが、他の「——うへ」形式は見えないのである。

ところで、ロドリゲスの説明に従うと、接尾語「うへ」の、必要にして十分な「対象の意味特徴」は「女」ということになるが、ロドリゲスが、その後要素「うへ」が「ははうへ」の「うへ」と使用対象において一致するとした「おう

接尾語「うへ」の成立と展開

へ」は、△女主の敬意的把握▽であるから、やはり接尾語「うへ」の「対象的意味特徴」は△女主▽なのである。ではなぜ、ロドリゲスは、△女▽というゆるやかな捉え方をしたのであろうか。実は、ここに引いた箇所の前後に、人に用いる、独立用法・前要素の「うへ」についての記述があり、そのことと関係があるように思われる。

Yesma (上様), 又は, vye (上)。「天下」(Tenca) 殿。

(三〇三頁)

○この助辞は上尊最上などといふことを意味する。Vye (上) とか Yesama (上様) とかいふ場合がそれである。(五七三頁)

また、『日葡辞書』にも、

Vye, I, vye sama. *Senhor suprema, com Rey, Cubô, &c.* (天璽や公方(將軍)などのような、世尊の主人)とある。「將軍」を「うへ」と呼ぶようになったのは、室町時代以降のようであるが、既に『太平記』に、執権の北条高時に対して、会話文では、「おはとの」「かうのとの」などのほか、

上ノ御存命ノ間ニ、今一度快ク敵ノ中へ懸入、思程ノ合戦シテ冥途ノ御伴申サン
(卷一〇・一一三五四頁)

車切・胴切・立破ニ仕棄度存候ツレ共、上ノ御事何ガト御心元ナクテ
(卷一〇・一一三五八頁)

と、「うへ」を用いた例が散見し、室町後期末には、「うへ」「うへさま」は、「天皇」「上皇」「將軍」に使うのが原則で、実際には、広く「主人」に対して用いることも可能であったと思われる。実のところ、ロドリゲスは、別の条で、次のようにそのことを述べているのである。

○Vye (上), 又は, yesama (上様) は Tenca (天下) 殿, 又主人或いは身分の高い人を指す。

(「後置詞とくふ」五二二頁)

つまり、単独用法・前要素の「うへ」(△主人の敬意的把握▽)——臣下の男性に対しても「うへ」が使われるようになったことが主因となつて、△女主の敬意的把握▽の「うへ」は、室町後期末までに、それに吸収され消滅している——と後要素「うへ」との使用対象の違いは、「主」か「女主」かの点にあり、この両者を区別する決め手は、△女▽という示差の意味特徴の有無であるから、ロドリゲスは接尾語「うへ」の使用対象を「女」としたと解されるのである。

先に引いた、ロドリゲスの記述に、はじめて注目したのは亀井孝氏の方法である。

ちなみに、日ポ辞書にチチウエ(父上)のかたちの見えないのは、偶然ではないとおもわれる。一般のこととしてみれば、この程度の片手おちは、日ポ辞書にあつてふしぎではないのであるが、いまの場合には、むしろわけがあつてのこと、すなわち、室町時代よりずっと以前の古代から、くだつて江戸時代におよぶまでチチウエのかたちはおこなわれていないようである。ただし、近世初頭のころには、ウエという接辞は女性に関することばにのみ添えるものであつたらしいのである。それは、ロドリゲスがその文典のなかに、二度までそのことにふれているからである(七七ウ、一五九ウ)。(原文ノ引用ガアルガ略スニ漆崎) こんにちでは類推にもとづく拡張によつて△おじうえ▽ (や△おばうへ▽)のかたちまでも文語的な表現としては使われるようになってゐるが、もとへさかのばれば△ははうへ▽は「孤高」の存在だったのである。(もとより、ここに孤高というのは譬喩である。したがつて、このばあいの「孤高」は、「高」であるがゆえに、「孤」たらざるをえないといった孤高ではなく「孤」であるかぎりにおいて「高」たりえただけの、そのような孤高にすぎない。しかしながら、要するに、このかたちは孤立して純粹に敬意のたかい表現であつたものであるう)。(「ハワからハハへ」『言語文化』四号・昭和四二年一月)

亀井孝氏の卓見として、「女」に対して用いる接尾語という、「うへ」についてのロドリゲスの指摘をよりどころに、

接尾語「うへ」の成立と展開

『日葡辞書』に「ちちうへ」の項が存しない点について必然性を認めたこと、「ちちうへ」の現れる時代を近世以降と限定したこと、「ちちうへ」の成立後に類推によって「をちうへ」「をばうへ」が生じる——ただし、ロドリゲスの記したとおりに接尾語「うへ」の「対象の意味特徴」を△女▽と認めたままでは、「をばうへ」が「ちちうへ」成立後に生じたという見解は説得力を欠くように思われる——と見通したことなどをあげることができよう。

しかし、「ははうへ」が、「——ごぜん」形式や「——ご」形式と比べて敬度が高いのは、接尾語「うへ」の「自律的意味特徴」が△女主という上位者としての敬意▽であることによるし、孤立化は、前要素の意味と「うへ」の△女主▽という「対象の意味特徴」との適合性に起因するのであって、「孤」であるかぎりにおいて「高」たりえたとか、「高」であるがゆえに「孤」たらざるをえないというような「孤高」ではなく、「孤」かつ「高」であるための「孤高」であったのである。

すなわち、室町後期における、接尾語「うへ」、「ははうへ」の意味は次のようになる。

接尾語「うへ」

1 自律的意味特徴

① 基礎的意味特徴……△上位者としての敬意▽

② 対象の意味特徴……△女主▽

2 接合的意味特徴……△母の一般的把握▽

「ははうへ」……△女主という上位者としての母の敬意的把握▽

なお、元来「ははうへ」と「おうへ」との連想関係は、△女主の敬意的把握▽の「うへ」を媒介としての間接的なも

のであったから、「女主」に対して用いる、単独用法の「うへ」が廃れたことで、室町後期末には、「ははうへ」は語構成の異なる「おうへ」との弱い連想関係によってのみ意味が支えられているという、非常に不安定な状態にあったと言
うことができる。

五、近世における後要素「うへ」

近世になると、「ちちうへ」「あにうへ」の語が使われるようになる。従来、近松門左衛門の作品あたりから見えはじめることが知られているが、それより早く江戸初期の「古浄瑠璃」に「ちちうへ」「あにうへ」の用例が存する。

のへにをくらせ給ひけり、あはれなるかなわか君、ちちうへの御あとを、よきにとふらいたまひけり

『ともなか』寛永一四年刊・五五頁

ちちうへいかにとありければ、ちちはなのめによるこひ

『あくちの判官』寛永一四年刊・五九頁

いかにもしてちちうへを、御よに出してくれよかし

『こ大ぶ』寛永一八年刊・一〇〇頁

あにうへをは、いつくへつれ行給ふそや□^{とカ}すかりつかせ給ひければ

『こ大ぶ』寛永一八年刊・一〇一頁

いかにちよ若さま、今まではそれかしが、あにうへと存□□□

『源氏のゆらひ』万治二年刊・一二八頁

さいごにあに上に、あひ奉る、ゑんの程こそふしんやな

『大友のまとり』寛文三年判・二九〇頁

用例から見ると、「あにうへ」は、「ちちうへ」に後れたものの、「ちちうへ」の成立後間もなく続いて生じたようである。

「ははうへ」は、勿論「古浄瑠璃」にも、

兄弟の人々は、いかに申さんはうへさま、何をなかせ給ふそや

〔『はなや』寛永十一年刊・三八頁〕

なふ／＼いかにはうへ様、さほとかなしみたまはんより

〔『あくちの判官』寛永十四年刊・六二頁〕

そのきにて母上も、なふいかにひめ御せん、ちの仰にしたかひて

〔『むらまつ』寛永十四年刊・七八頁〕

と、早くから盛んに用いられているが、「あねうへ」は、

扱はさやうに候かや、今まであね上を、ま事の母上也と存したり

〔『源氏のゆらひ』万治二年刊・一二八頁〕

ましてや女の身にて、思ひもよらぬ次第也、あね上さまとぞ仰ける

〔『石ばし山』万治二年以前刊・三一五頁〕

はまにましますあねうへに。御いとまごい仕。其後いかにもならんと

〔『さんせう太夫』寛文七年刊・五二頁〕

と、近世では、万治年間にならないと確実な例が見えないのである。寛文七年刊の『さんせう太夫』には、「あねうへ」

〔「あねうへさま」を含む〕が五例あるのに、寛永一六年刊の『さんせう太夫』には、

つしわう殿はきこしめし、あねごのかほを御らんじて、なふ／＼いかにあねこ様、さて□御身（もカ）の

（一五頁）

というように、「あねご（さま）」ばかりで、「あねうへ」が全く用いられていないので、「あねうへ」の再成立は万治年

間をあまり遡るまい。すなわち、江戸時代初頭、「——うへ」形式は、孤立していた「ははうへ」に、「ちちうへ」が加

わり、引き続き「あにうへ」が成立した時点で一度安定したと推定されるのである。

それでは、近世において、まず「ちちうへ」、さらに、すぐに続いて「あにうへ」が成立した段階で、「——うへ」形

式が安定したのはなぜであろうか。

前章において、室町後期末には「ははうへ」が非常に不安定な状態にあったと述べたが、「ちちうへ」の成立は、「はは

うへ」の後要素の「うへ」の意味を支えるものとして△主の敬意的把握▽である、単独用法の「うへ」との間に強い連想関係が働くようになったからだと思われる。つまり、接尾語「うへ」の「対象的意味特徴」が、△女主▽から△主▽へと拡大したために、「父」に対しても接尾語「うへ」が使いうるようになったのである。「ははうへ」が、△女主という上位者としての母の敬意的把握▽より、△主という上位者としての母の敬意的把握▽へ意味変化したことで、その「ははうへ」と対をなすべく、△主という上位者としての父の敬意的把握▽の意味の「ちちうへ」が成立したのである。

さて、問題なのは、「あにうへ」の成立に関してであるが、「あにうへ」が、「ちちうへ」の成立後まもなく生じたということから、接尾語「うへ」が、「ちちうへ」成立後急に著しく意味が変わったと考えるのはいかにも不自然である。基本的には、接尾語「うへ」の「自律的意味特徴」は、ほぼ△主という上位者としての敬意▽のままと解すべきだとすれば、△主という上位者としての兄の敬意的把握▽という捉え方が、なにゆえに可能なのであろうか。まず考えられるのが、「基準となる人物の兄」が「その世界の主」の場合に、「あにうへ」が用いられるのではないかとということであるが、それならば、同様な条件下で、「あねうへ」もこの期に成立しそうなものである。しかも、「あにうへ」の初出の『こ大ぶ』の例を検討すると、使用対象の「とも春」は、その「父」の支配下から独立しておらず、彼は「主」ではないのである。そこで、次に、やがてその世界を受け継ぎ「主」となるところの「世嗣」としての「兄」に対して、「主に準じた人物」ということで、「あにうへ」が使われたのではないかとということである。この解釈に立てば、「あねうへ」の再成立が後れたことも説明できるし、先の例の「とも春」は「長子」だから、「あにうへ」と呼ばれてもおかしくない。それで、この仮説の論拠としては、「世嗣」を「主」並みに扱った表現、「次代の主」として待遇した表現が確認できればよいわけであるが、江戸初期成立の『異本伯耆巻』や江戸前期成立の『好色一代女』に、

接尾語「うへ」の成立と展開

間ヒケレハ。亦人申ハ。イヤトヨ大殿ハ上リ玉ハス。若殿計御上洛候

〔『異本伯耆卷』一六〇頁〕

東國づめのとし、ある大名の御前死去の後、家中は若殿なき事をかなしみ

〔『好色一代女』卷一・三三六頁〕

と、「世嗣」に対して「わかとの」が用いられている。ゆえに、「あにうへ」は、「次代の主としての兄」を、△準主▽と捉えることによって成立した表現と思われる。

したがって、「あにうへ」の成立時を江戸前期初とすると、この期の、接尾語「うへ」、「あにうへ」「ちちうへ」「ははうへ」の意味は次のようになる。

接尾語「うへ」

1 自律的意味特徴

① 基礎的意味特徴……△上位者としての敬意▽

② 対象的意味特徴……△(準)主▽

2 接合的意味特徴……△父・母・兄の一般的把握▽

「あにうへ」……△準主という上位者としての兄の敬意的把握▽

「ちちうへ」……△主という上位者としての父の敬意的把握▽

「ははうへ」……△主という上位者としての母の敬意的把握▽

ところで、前述したことより、「あねうへ」の再成立は、接尾語「うへ」の「対象的意味特徴」が△(準)主▽ではなくなったことを意味している。近世において、「あねうへ」が初めて見える『源氏のゆらひ』には、「父」「母」「兄」

「姉」に対する尊敬表現として、「ちちうへ」「ははうへ」「あにうへ」「あねうへ」のみが使われ、一方、「叔父」に対しては、

たゞ今、はゝ上の仰をきけは、さてはおちごに候かや、かたきをうたせ給はゝ

(二二八頁)

と、「をちご」が用いられており、この作品では、親族に対する敬称として、「うへ」と「ご」が相補的關係にある。このような使い分けが偶然でないことは、「をちうへ」「をばうへ」の確実な例が、かなり降らなければ存しないことから明らかである。つまり、「あねうへ」の再成立の時点では、接尾語「うへ」の「対象的意味特徴」は、現代のような△一世代上以内の親族▽ではなく、△目上の肉親▽であったと考えられる。おそらく、「あねうへ」の再成立の直前までは、接尾語「うへ」の「対象的意味特徴」が、△目上の肉親▽に変化し、「基準となる人物の兄」であれば、「あにうへ」が使えるようになり、「ぢぢうへ」…「おぢうへ」…「おぢい」…「おぢい」…「おぢい」という關係を満たすものとして、「あねうへ」が再び生じたと思われる。こうした接尾語「うへ」の意味変化は、△主の敬意的把握▽である、単独用法の「うへ」との連想關係の弱化によるものであらう。△主の敬意的把握▽の「うへ」は、幕藩体制の確立に伴い、△主▽の外延が減少し、広く「主」を指しえなくなり、武家社会では、ひとり「將軍」に限定されるようになった。そのために、接尾語「うへ」との連想關係が衰え、接尾語「うへ」は、その代わりに、漠然と△貴人・上位者▽の意味で用いる「うへ」との連想關係のほうが強くなったからではなからうか。

「あねうへ」の再成立の段階を江戸前期中とすると、この期の、接尾語「うへ」、「あにうへ」「あねうへ」「ちちうへ」「ははうへ」の意味は次のようになる。

接尾語「うへ」

接尾語「うへ」の成立と展開

1 自律的意味特徴

① 基礎的意味特徴……△上位者としての敬意▽

② 対象的意味特徴……△目上の肉親▽

2 接合的意味特徴……△父・母・兄・姉の一般的把握▽

「あにうへ」……△目上の肉親という上位者としての兄の敬意的把握▽

「あねうへ」……△目上の肉親という上位者としての姉の敬意的把握▽

「ちちうへ」……△目上の肉親という上位者としての父の敬意的把握▽

「ははうへ」……△目上の肉親という上位者としての母の敬意的把握▽

「あねうへ」の再成立以降の江戸前期には、

おもてをやはらげ、なふいかに父うへさま、さ程に思ひ立給ふ

（『勝尾寺御本地』寛文一〇年刊・三三八頁）

ある時、わか君、はうへに近付、ちうのかたみのまき物に

（『誓願寺本地』寛文八年刊・二五三頁）

あに上、こゝなるとのこそたにんにて、そばへよせじ

（『かけ正しいかづちもんだう』寛文年間刊・四三八頁）

ほうく手をつけてあねうへの御ありしよを、たづねゑさせよ

（『くずは道心』延宝二年刊・五一九頁）

など、「ちちうへ」「ははうへ」「あにうへ」「あねうへ」は存するが、「をぢうへ」「をばうへ」は見えない。就中、『か

け正しいかづちもんだう』には、「あにうへ」のほか、「ちちうへ」「ははうへ」——「姉」なる人物は登場しないので、当

然「あねうへ」はない——が用いられているが、「をばうへ」が期待されるところには、例えば、

御おばきみと申ながら、ま事は、かけ久の、はゝ上にてましませは、しらせ申さぬみちならす (四三六頁)

のように、いずれも「(おん)をばきみ」とあるから、「をばうへ」が成立していないことは疑いない。また、「ちちうへ」「ははうへ」「あにうへ」「あねうへ」の使用例で、用法上問題となるものもないので、「あねうへ」成立以後江戸前期においては、接尾語「うへ」「——うへ」形式の意味は変化してはいないと思われる。

江戸中期にも、

日来^{ひごろ}恋しい床しいと申し暮^ぐせし父上^{うへ}。日本にてまうけ給ひし母兄弟 (『国性爺合戦』正徳五年初演・二六四頁)

義理有^{あり}今の母上様殊^{つね}に常のお身でもなし (『源平布引滝』寛延二年初演・七四頁)

兄上^への詞共^{こと}覚^さず。一旦^{いつ}御供申せし某^し。目前^{もくぜん}怪敷神^{あやしき}の御告^{つげ} (『神靈矢口渡』明和九年初演・三一八頁)

さぞやあねうへ水からを恨させ給はん、世の中に神や仏も (『熊谷先陳問答』宝永年間刊・二〇三頁)

というように、「ちちうへ」「ははうへ」「あにうへ」「あねうへ」が存するが、「をちうへ」「をばうへ」は見えない。安永六年に刊行された『和訓栞(前篇)』に、接尾語「うへ」についての言及があるが、

○父うへ母うへ姉うへ兄うへ尼うへなとすべて尊称にもなれり西「土長」上明「上の称のことし

(巻四・二四丁裏)

と、やはり「をちうへ」「をばうへ」はあがつていない。「ちちうへ」「ははうへ」「あねうへ」「あにうへ」「あまうへ」の順は、当時用いられていた、「ちちうへ」から「あにうへ」までと、死語の「あまうへ」⁽⁸⁾とを区別する意識に基づくと思われる。「など」とあるが、これは、その時までには廃れた「——うへ」形式の存在を想定したもので、「をちうへ」「をばうへ」を省略したという意味ではなからう。仮に、「をちうへ」「をばうへ」が存していたとすれば、「ちちうへ」

接尾語「うへ」の成立と展開

「ははうへ」「あにうへ」「あねうへ」からは一語も省かずに、「をぢうへ」「をばうへ」はともに取らないというのは不自然である。谷川士清は、接尾語の「き」も取りあげていて、もっとも、そこでは、

○俗語に伯父き兄きなどいふはきみの略なり物語にこもきあてきなけいぬきなどの名みえたればふるくいへる

詞なり

(巻七・一丁表)

と、接尾語「き」が、当時よく使われていた俗語であるために、「伯父き」「兄き」しかあげていないけれども、「伯父き」「兄き」というように、他の「――き」形式が、ある程度推定できるようなあげかたをしている。だから、もし「をぢうへ」「をばうへ」が成立していたならば、例えば、「ちぢうへ」「をぢうへ」「あにうへ」のようなあげかたをするはずなのである。ましてや、接尾語「うへ」は、接尾語「き」とは異なり、むしろ雅語的であるから、詳述が期待されるところである。したがって、士清は、彼が知る限りの「――うへ」形式を総てあげていると解すべきであろう。

それでは、「をぢうへ」「をばうへ」の成立は、いつ頃かと言うと、管見の範囲では、江戸時代の後半、柳亭種彦の作品あたりからのものである。『修紫田舎源氏』には、「をぢうへ」が二例、

まさひささまはるのりさまは玉くずのをぢうへなりむかしはめいをつまと(三三篇・天保十一年刊・一八丁裏)

母上のお迎へに、叔父上^{せち}がお出でなされ、わたくしをも諸共に(三九篇・未刊・七六四頁)

「をばうへ」が四例見える。

うづなみとてわがおばうへゆゑありていへでのときたづさへられしと(六篇・天保三年刊・八丁裏)

いへでありしわがをばうへうづなみのじつはむすめかやう／＼の事どもに(一二篇・天保五年刊・一二丁裏)

おはするさまたゞかのをばうへのふちのかたにつゆたがふところなし(一三篇・天保五年刊・二〇丁表)

をばうへとしりながらうちすておかんはほんいにそむけり

(二九篇・天保一〇年刊・九丁表)

勿論「ちちうへ」「ははうへ」「あにうへ」「あねうへ」も、それぞれ、六六例、八三例、一四例、一三例もあり、

それゆゑに父うへよりやかたへもどれとときのふおつかひおそばにをるも

(初篇・文政一二年刊・一六丁表)

〔他六五例〕

ぐんりやうづれのつまや子を母うへのばどさまのとかならずともに

(初篇・文政一二年刊・一六丁表)

〔他八二例〕

おもひがけなきこりやあにうへはつとばかりにさしうつぶく

(初篇・文政一二年刊・一九丁裏)

〔他一三例〕

やうすあつてあねうへみつうぢぎみよりくださるおふみそれかへして

(四篇・天保二年刊・五丁表)

〔他一二例〕

「をちうへ」「をばうへ」よりも用例が多いが、それら以外に、「あまうへ」(一例)「ひめうへ」(四一例)の形式もあり、

うち見ればうちぎのきぬはあまうへよりもらふたおぼえのぬひもやう

(五篇・天保二年刊・一六丁裏)

おんかほのみにくしとうはさのたかきひめうへとおそれながらとりかへなば

(二二篇・天保八年刊・一一丁表)

〔「ひめうへ」…他四〇例〕

「をちうへ」「をばうへ」がどのような意図で使われているのか、速断はできないのである。

まず、「あまうへ」について、『和訓栞(前篇)』の記述からして、種彦がこの「うへ」を敬称の接尾語として用いて

接尾語「うへ」の成立と展開

いることは動かないが、「あまうへ」と呼ばれる人物は、中古中世におけるような「女主」ではないので、「あまうへ」が「女主」の意味特徴をもっていないことは確実である。また、「ひめうへ」は、そもそも、「ひめ」が「娘」という意味特徴を有するので、「女主」という意味特徴をもつ形式とは共起 (cooccurrence) しえないし、次の例からも明らかなように、「ひめぎみ」の同義的表現として使われているのである。

いたばたけのおんちすちにまぎれなければわれしらずひめぎみよひめうへよとよびまゐらす事のあり

(三一篇・天保一〇年刊・一四丁表)

そこで、「あまうへ」「ひめうへ」の「うへ」が同じ意味だとすれば、それらは、それぞれ「貴女」としての尼の敬意的把握「貴女」としての姫の敬意的把握「貴女」の意味で用いられていることになる。つまり、『修紫田舎源氏』には、「貴女」としての敬意「うへ」という「自律の意味特徴」をもつ接尾語「うへ」も存するわけである。

では、このような二種類の接尾語「うへ」の混在はなぜおこったのであろうか。『修紫田舎源氏』より成立はやや後れるが、天保年間をあまり降らない、ほぼ同時代の『後松日記』(松岡行義著)に、接尾語「うへ」が、接尾語「ごぜ(ん)」の使われる前の時代の和語系の、「女」に対する敬称であると指摘したところがある。

○ひと日水天宮にまうでぬ。鳥居の額に尼御前と書たり。こは平氏二位の尼君なめれば、其頃のやまとことばのまに／＼かきたるにためてたかりける。此御前といふに二つあり。一は女の尊称にて某御前、尼御前、わごぜなどいへり。これよりまへは某上、某君とぞいひける。今も搢紳家にては女子を某君といひ、宮家にては某宮、吾妻にては某姫君と称し奉るなり。又一は前駆の事をござといふ。こは上達部の召具せらるゝなり (卷一六・三九三頁)

正確な捉え方ではないけれども、後要素「うへ」に女性専用の時代があったという指摘は日本人の発言としては最も早

いと思われる。もつとも、松岡行義ほど故実に精通しておらずとも、「物語文学」に親しんだものであれば、「——うへ」形式が古くは「男」に対して使われていないことに気づいていたであろう。また、『後松日記』の記述からは、当時「——うへ」形式には、△貴女▽を「対象的意味特徴」とする用法が存しないということが読みとれるので、『修紫田舎源氏』における、「あまうへ」「ひめうへ」の使用には特別の意識が働いていると解される。すなわち、種彦は、『修紫田舎源氏』の題材である『源氏物語』の世界を髣髴とさせる表現の一つとして、「貴女」を使用対象とする接尾語「うへ」を用いていると考えられる。その種の表現が意図的に採用されている事情が、「一〇篇」（天保四年刊）の序より知ることがができる。

初めてこの田舎源氏を作りでんとしたる刻。老たる友人子に曰。いかにも源氏の条をくづさずなるべき程は詞をも其儘用ひて書たまへ源氏を読ざる童子のすこしは助となる事あらん。若き友人子に曰源氏の条を翻案して歌舞妓狂言浄瑠璃のおもむきに綴り玉へ源氏を読ざる者やはある。（中略）是にまどひて初篇の草稿いくたびか書なほし。まづ若き人の意見につき。泥蔵の物がたり人丸堂の無言場。温く仕込でかいたれど。標題の源氏がさめて水にならう巻きの。詞をそろく折くべて去年今年と沸しつけ既に十編に及びしが。この湯の加減未分らず赤本にはうつらぬ詞が多くて熱く読うくおぼさば仙鶴堂を打玉へ。次の編より狂言の水をうめて温くせん。

『源氏物語』を原典と仰ぎ、舞台を室町時代に置き、そして「草双紙」という大衆的読み物であるために、『修紫田舎源氏』には、中古語的表現、中世語的表現、近世語が混在しているのである。今問題にしている「あまうへ」は、まさしく中古語的表現として用いられているのであるが、「あまうへ」と呼ばれる人物には、中世語的表現の「あまごぜ」も使われているのである。また、「ひめうへ」は、「あまうへ」と「あまぎみ」との関係を誤って捉えたために、「ひめ

接尾語「うへ」の成立と展開

ぎみ」との対として使われた、中古には語形すら存しえないところの中古語的表現であったわけである。

ともかく、『修紫田舎源氏』に、△貴女▽を「対象の意味特徴」とする「うへ」が存する以上、「をばうへ」についてもその可能性を考えてみなければならぬが、「をばうへ」と対義関係の「をぢうへ」という形式があり、しかも、その「をぢうへ」は、『修紫田舎源氏』とは異なり、「物語文学」の影響のない、種彦の他の作品にも、

村はづれの地藏堂ぢざうだうの前まへをとをりしに。仲父おぢうへは。此為このため体たい（『浅間嶽面影草紙』文化六年刊・巻一・二四丁表）

と、見えるから、「をぢうへ」「をばうへ」は、「ちぢうへ」「ははうへ」「あにうへ」「あねうへ」との連想によって成立したことは疑いない。すなわち、『修紫田舎源氏』には、接尾語「うへ」に、「自律の意味特徴」が、△貴女としての敬意▽という意味の中古語的表現と△一世代上以内の目上の親族という上位者としての敬意▽という意味の当代語との二種類の用法が存しているのである。

この二つの用法のうち、前者は特殊で一時的な用法だから、これ以上言及しないが、前代の「——うへ」形式の継承の変化で現代まで維持されている、後者の用法に関して、次に、成立の背景について考察することにしよう。

前述したように、大雑把に言えば、「をぢうへ」「をばうへ」の形式は、「ちぢうへ」「ははうへ」「あにうへ」「あねうへ」との連想によって成立したことは疑う余地がない。「ちぢうへ」「ははうへ」「あにうへ」「あねうへ」が、「肉親」よりももっと抽象的な「親族」という枠で捉えられるようになることが、「をぢうへ」「をばうへ」の成立の前提である。他方、同様に「目上の親族」でありながら、「祖父」「祖母」を使用対象とする、「ぢぢうへ」「ばばうへ」のような「——うへ」形式は成立していない。これは、「親族」という観点に立った場合にさえ、「をぢうへ」「をばうへ」以外にあらたに「——うへ」形式が成立しえないほどに、「——うへ」形式の使用には、なお厳密な意味的条件が存してい

るからだと考えられる。そこで、「ちち」「はは」「あに」「あね」「をぢ」「をば」「ちぢ」「ばば」の意味を構成する意味成分を検討することによって、この意味的条件を明らかにしようと思う。まず、「あに」「あね」「ちち」「はは」の意味は次の如くである。

「あに」……△準直系の同世代年長の男の親族▽

「あね」……△準直系の同世代年長の女の親族▽

「ちち」……△直系の一世代上の男の親族▽

「はは」……△直系の一世代上の女の親族▽

共通する意味成分を抜き出して整理し、使用対象を分析すると、接尾語「うへ」は、「直系」ならば「一世代上の親族」、「準直系」ならば「同世代年長の親族」に対して用いられていることになる。一方、「ちぢ」「ばば」「をぢ」「をば」の意味は次のとおりである。

「ちぢ」……△直系の二世代上の男の親族▽

「ばば」……△直系の二世代上の女の親族▽

「をぢ」……△準直系の一世代上の男の親族▽

「をば」……△準直系の一世代上の女の親族▽

このままでは、無論「ちぢ」「ばば」「をぢ」「をば」は皆条件に適さないが、「をぢ」「をば」の△準直系▽という意味成分は、「あに」「あね」と共通するし、△一世代上▽は「ちち」「はは」と一致するのである。つまり、「をぢ」「をば」の意味は、意味成分に分析すれば、総て「ちち」「はは」「あに」「あね」の意味のいずれかに含まれているのである。

接尾語「うへ」の成立と展開

ところが、「ぢぢ」「ばば」の△二世代上▽という意味成分は、「ちち」「はは」「あに」「あね」の意味のどれにも存しないのである。したがって、「をぢうへ」「をばうへ」のみがあらたに成立したのは、これらの前要素が、ともに△一世代上▽△準直系▽の意味成分をもっていたからにはかならない。そして、「をぢうへ」「をばうへ」の成立過程は、意味的条件の、△〔直系かつ一世代上〕か〔準直系かつ同世代年長〕▽から、△〔直系か準直系〕かつ〔△一世代上か同世代年長〕▽への変化として捉えることができる。この過程は、単純な意味の拡大である。ただし、「直系の同世代年長」という「親族」は存在しないから、接尾語「うへ」の「対象的意味特徴」は△一世代上以内の目上の親族▽として規定できるのである。

意味を細分して意味成分の次元で検討すると、「をぢうへ」「をばうへ」は、このように、むしろ成立すべくして成立したと言えるのであるが、かなりの時を経て、これらの形式が生じたのはなぜであろうか。「あねうへ」の再成立後、「をぢうへ」「をばうへ」の成立がはなはだしく後れたのは、「ちち」「はは」「あに」「あね」の間の連想関係が非常に強かったからに相違ない。△目上の肉親▽という、意味の場が極めて安定したものであったからである。では、なにゆえ、それが、明治以降でもなく、江戸中期でもなく、江戸後期であったかという問に対しては、残念ながら明快な解答を見い出せないのであるが、「をぢうへ」「をばうへ」成立以前の、△目上の肉親▽という「対象的意味特徴」の安定性が非常に高いこと、種彦と同時代の代表的作家である滝沢馬琴の、『南総里見八犬伝』をはじめとする、主要な作品に「をぢうへ」「をばうへ」が見えないことなどを考慮すれば、あるいは「ちち」「はは」「あに」「あね」を「肉親」よりも広い枠の「親族」において捉え、「をぢ」「をば」の意味成分との対応関係に直感した、種彦の意図的な、「——うへ」形式の用法の拡張であったということかもしれない。

江戸後期における、接尾語「うへ」（普遍的用法）、「あにうへ」「あねうへ」「ちちうへ」「ははうへ」「をちうへ」「をばうへ」の意味は次のとおりである。

接尾語「うへ」（普遍的用法）

1 自律の意味特徴

① 基礎的意味特徴……△上位者としての敬意▽

② 対象の意味特徴……△一世代上以内の目上の親族▽

2 接合の意味特徴……△父・母・伯（叔）父・伯（叔）母・兄・姉の一般的把握▽

「あにうへ」……△一世代上以内の目上の親族という上位者としての兄の敬意的把握▽

「あねうへ」……△一世代上以内の目上の親族という上位者としての姉の敬意的把握▽

「ちちうへ」……△一世代上以内の目上の親族という上位者としての父の敬意的把握▽

「ははうへ」……△一世代上以内の目上の親族という上位者としての母の敬意的把握▽

「をちうへ」……△一世代上以内の目上の親族という上位者としての伯（叔）父の敬意的把握▽

「をばうへ」……△一世代上以内の目上の親族という上位者としての伯（叔）母の敬意的把握▽

六、おわりに

以上、後要素「うへ」、「——うへ」形式の変遷について考察したが、接尾語「うへ」の成立は鎌倉後期で、その後

接尾語「うへ」の成立と展開

「ははうへ」孤立時代（室町後期）、「ちちうへ」「ははうへ」時代（江戸前期初）、「ちちうへ」「ははうへ」「あにうへ」時代（江戸前期初—江戸前期中）、「ちちうへ」「ははうへ」「あにうへ」「あねうへ」時代（江戸前期中—江戸後期）があつて、現代のように、「——うへ」形式が「ちちうへ」「ははうへ」「をぢうへ」「をばうへ」「あにうへ」「あねうへ」と揃つたのは江戸後期になってからである。

複合語後要素の接尾語化・展開の過程は、概して、意味の拡大として捉えられることが期待されるが、「うへ」の場合、意味の縮小の過程を含み、また「ははうへ」孤立時代以降、「接合的意味特徴」にのみ注目すれば、典型的な意味の拡大であるが、「ちちうへ」「あにうへ」の成立までと、「あねうへ」の再成立以降とは、意味変化の方向が異なり、単純な拡大とは言えないのである。

普通、語の意味変遷は、文脈（構文的職能を含む）・類義関係・対義関係などを中心に検討されるが、合成語の後要素を扱う場合、「うへ」の変遷からも明らかなように、単独用法との連想関係の消長という観点も必要である。

なお、「——うへ」形式が文語的表現とはいえ、いまだに廃れず存し続けているのは、「年齢（年長・年少）」が、現代における、待遇の主要な尺度であることとかわつていよう。

〔使用テキスト〕

本稿において、引用の際に使用したテキストは次のとおりである。

- 宇津保物語 『宇津保物語本文と索引 本文編』 昭和四八年 笠間書院
- 枕草子 『校本枕冊子』 昭和二八・三一年 古典文庫
- 源氏物語 『源氏物語大成』（校異篇） 昭和二八年 中央公論社
- 栄花物語（正篇） 『日本古典文学大系』第七五・七六巻 昭和三九・四〇年 岩波書店
- 更級日記 『御物 更級日記 藤原定家筆』昭和四七年 笠間書院
- 多武峯少将物語 『多武峯少将物語本文及び総索引』昭和四七年 笠間書院
- 御堂関白記 『大日本古記録御堂関白記』上・中・下 昭和二七・二九年 岩波書店
- 夜の寝覚 『日本古典文学大系』第七八巻 昭和三九年 岩波書店
- 狭衣物語 『日本古典文学大系』第七九巻 昭和四〇年 岩波書店
- 浜松中納言物語 『校本浜松中納言物語』昭和三四年 二玄社

北大文学部紀要

- 水左記 『増補史料大成』第八巻 昭和四〇年 臨川書店
- 栄花物語（統篇） 『日本古典文学大系』第七六巻 昭和四〇年 岩波書店
- 大鏡 『日本古典文学大系』第二一巻 昭和三五年 岩波書店
- 堤中納言物語 『堤中納言物語校本及び総索引』昭和四五年 風間書房
- 今昔物語集 『日本古典文学大系』第二二・六巻 昭和三四・八〇年 岩波書店
- 大納言経信集 『日本古典文学大系』第八〇巻 昭和三九年 岩波書店
- 俊頼口伝集 『続々群書類従』第一五 明治四〇年 国書刊行会
- 散木奇歌集 『阿波本 散木奇歌集本文校異篇——本文・校異と集注』昭和五四年 風間書房
- 山家集（聞書残集） 『日本古典文学大系』第二九巻 昭和三六年 岩波書店
- 今とりかへばや物語 『とりかへばや物語本文と校異』昭和五三年 大学堂書店
- 在明の別 『天理図書館善本叢書と書之部』第六巻 昭和四七年 天理大学出版部
- 中右記 『増補史料大成』第九・一五巻 昭和四〇年 臨川書店

接尾語「うへ」の成立と展開

- 殿曆 『大日本古記録殿曆』一～四 昭和三五～四三年 岩波書店
- 永昌記 『増補史料大成』第八卷 昭和四〇年 臨川書店
- 長秋記 『増補史料大成』第一六・一七卷 昭和四〇年 臨川書店
- 兵範記 『増補史料大成』第一八～二二卷 昭和四〇年 臨川書店
- 台記 『増補史料大成』第二三・二四卷 昭和四〇年 臨川書店
- 玉葉 『玉葉』第一～三 明治三九年 国書刊行会
- 吉記 『増補史料大成』第二九・三〇卷 昭和四〇年 臨川書店
- 山槐記 『増補史料大成』第二六～八卷 昭和四〇年 臨川書店
- 無名草子 間書院 『無名草子水府明徳会影考館蔵』昭和四八年 笠
- 物語二百番歌合 『定家自筆本物語二百番歌合と研究』(竹本元規・久曾伸昇編著) 昭和三〇年 未刊国文資料刊行会
- 古事談 『新訂増補国史大系』第一八卷 昭和七年 吉川弘文館
- 癡心集 『校註鴨長明全集』昭和四六年 風間書房
- 続古事談 『群書類従』第二七輯(訂正三版) 昭和三十五年 続群書類従完成会
- 三長記 『増補史料大成』第三一卷 昭和四〇年 臨川書店
- 明月記 『明月記』第一～三(合冊) 昭和一〇年 国文名著刊行会
- 承久記(流布本) 『国史叢書承久記』大正六年 国史研究会
- 十訓抄 『十訓抄』(岩波文庫) 昭和一七年 岩波書店
- 古今著聞集 『日本古典文学大系』第八四卷 昭和四一年 岩波書店
- 世継物語 『続群書類従』第三三輯下(訂正三版) 昭和三二年 続群書類従完成会
- 住吉物語(明日香井家本) 『国語学論集』第一輯 昭和五三年 笠間書院
- あさちが露 『天理図書館善本叢書と書之部』第六卷 昭和四七年 天理大学出版部
- むぐらの宿 『桂宮本叢書』第一五卷(増訂再版) 昭和三二年 養徳社
- 石清水物語 『中世物語の基礎的研究資料と史的考察』(桑原博史著) 昭和四四年 風間書房
- 苔の衣 『古典文庫』第八一・八三冊 昭和二九年 古典文庫
- いはでしのぶ物語 『いはでしのぶ物語本文と研究』(小木喬著) 昭和五二年 笠間書院
- 我身にたどる姫君 『物語文学の研究——本文と論考——』(金子武雄著) 昭和四九年 笠間書院

○しのびね物語 『中世物語の基礎的研究資料と史的考察』

(桑原博史著) 昭和四四年 風間書房

○風につれなき物語 『続々群書類従』 第一五 明治四〇年 国書刊行会

○平戸記 『増補史料大成』 第三二・三三卷 昭和四〇年 臨川書店

○吾妻鏡(前半) 『新訂増補国史大系』 第三二卷 昭和七年 吉川弘文館

○沙石集 『日本古典文学大系』 第八五卷 昭和四一年 岩波書店

○平家物語(寛一本) 『日本古典文学大系』 第三二・三三卷 昭和三四・三五年 岩波書店

○かぜに紅葉 『桂宮本叢書』 第一七卷 昭和三一年 養徳社

○恋路ゆかしき大将(一々四) 『物語文学の研究——本文と論考——』(金子武雄著) 昭和四九年 笠間書院

○恋路ゆかしき大将(五) 『桂宮本叢書』 第一六卷 昭和三四一年 養徳社

○小夜衣 『中世物語の基礎的研究資料と史的考察』(桑原博史著) 昭和四四年 風間書房

○八重葎 『古典文庫』 第一七三冊 昭和三六年 古典文庫

○木幡の時雨 『国語国文』 第七卷第一〇号 昭和一二一年

○白露物語 『物語文学論攷』(中野幸一著) 昭和四六年 教

育出版センター

○平家物語(延慶本) 『延慶本 平家物語』 昭和三九年 古典研究会

○仮名文字遣(文禄四年本) 『陽明叢書 国書篇』 第一四輯 昭和五一年 思文閣出版

○増鏡 『日本古典文学大系』 第八七卷 昭和四〇年 岩波書店

○曾我物語 『日本古典文学大系』 第八八卷 昭和四一年 岩波書店

○太平記 『日本古典文学大系』 第三四・六卷 昭和三五・七一年 岩波書店

○春栄 『日本古典文学大系』 第四〇卷 昭和三五年 岩波書店

○夜討曾我 『日本古典文学大系』 第四一巻 昭和三八年 岩波書店

○三井寺 『日本古典文学大系』 第四一巻 昭和三八年 岩波書店

○鐸かづき 『影印 室町物語集成』 第一輯 昭和四五年 汲古書院

○千しゆ女 『影印 室町物語集成』 第二輯 昭和四五年 汲古書院

○いわやひめ 『影印 室町物語集成』 第三輯 昭和四五年 汲古書院

接尾語「うへ」の成立と展開

- 日本大文典（ロドリゲス著）『ロドリゲス 日本大文典』（土井忠生訳）昭和三〇年 三省堂
- 日葡辞書 『日葡辞書』昭和四八年 勉誠社
- サントスの御作業 『サントスの御作業』昭和五一年 勉誠社
- 天草版平家物語 『勉誠社文庫』第七・八巻 昭和五一年
- スピリツアル修行 『スピリツアル修行の研究 影印・翻字篇』（林田明著）昭和五〇年 風間書房
- ともなか 『古浄瑠璃正本集』第一巻 昭和一四年 大岡山書店
- あくちの判官 『古浄瑠璃正本集』第一巻 昭和一四年 大岡山書店
- こ大ぶ 『古浄瑠璃正本集』第一巻 昭和一四年 大岡山書店
- 源氏のゆらひ 『古浄瑠璃正本集』第二巻 昭和一六年 大岡山書店
- 大友のまとり 『古浄瑠璃正本集』第三巻 昭和三九年 角川書店
- はなや 『古浄瑠璃正本集』第一巻 昭和一四年 大岡山書店
- むらまつ 『古浄瑠璃正本集』第一巻 昭和一四年 大岡山書店
- 石ばし山 『古浄瑠璃正本集』第二巻 昭和一六年 大岡山書店
- さんせう太夫 『説経節正本集』第一巻 昭和一一年 大岡山書店
- 山書店
- 異本伯耆巻 『続群書類従』第二〇輯上 大正一二年 続群書類従完成会
- 好色一代女 『日本古典文学大系』第四七巻 昭和三二年 岩波書店
- 勝尾寺御本地 『古浄瑠璃正本集』第五巻 昭和四一年 角川書店
- 誓願寺本地 『古浄瑠璃正本集』第五巻 昭和四一年 角川書店
- かけ正いかづちもんだう 『古浄瑠璃正本集』第四巻 昭和四〇年 角川書店
- くずは道心 『古浄瑠璃正本集』第五巻 昭和四一年 角川書店
- 国性爺合戦 『日本古典文学大系』第五〇巻 昭和三四年 岩波書店
- 源平布引滝 『日本古典文学大系』第五二巻 昭和三四年 岩波書店
- 神靈矢口渡 『日本古典文学大系』第五五巻 昭和三六年 岩波書店
- 熊谷先陳問答 『説経節正本集』第一巻 昭和一一年 大岡山書店
- 和訓栞（前篇） 北海道大学所蔵板本

○修紫田舎源氏（初〜三八篇） 国会図書館所蔵板本

○修紫田舎源氏（三九・四〇篇）『日本名著全集』第一期第二卷 昭和三年 日本名著全集刊行会

○後松日記『日本随筆大成』第三期第四卷 昭和四年 日本随筆大成刊行会

○浅間嶽面影草紙 国会図書館所蔵板本

注

(1) なお、「ババうえ」「ママうえ」という「——うへ」形式をテレビマンガ（『忍者ハットリくん』）において、忍者の少年が、寄宿先の友人の「父」「母」に対して使っている——これらは、忍者という人物設定上の条件と、視聴者が子供であるという制約から生じた、文語性と俗語性との折衷された表現である——が、目下極めて例外的な現象にすぎないので、これらは含めない。

(2) 『栄花物語抄』（岡本保孝、文久二年）には、^シ宰相の北方^ヲを「基子の母也基平室良頼女」（『国文註釈書』明治四二年、国学院大学出版部・四二三頁）、^シ祖母上^ヲを「良頼女の母上をさす承譜にはたれの女ともなし基子より祖母にあたるさればしかいふ」（前同）とし、別人と見なしている。

(3) 現存の『あまのかるも』には、「ははうへ」が八例（『古典文庫』（二七三・二七六冊 昭和五年 古典文庫）による）、

御返はうへきこえ給

（上・四九頁）

〔他七例〕

存する。草稿本であれば、この期の成立ということになるが、鎌倉後期の改作本の可能性もある。

(4) 竹本元暉・久曾神昇編著『定家自筆本物語二百番歌合と研究』昭和三〇年 未刊国文資料刊行会、一四八頁。

(5) 『承久記』（前田本）には、「あまうへ」が一例（『国史叢書承久記』（大正六年 国史研究会）による）、『承久軍物がたり』には、「あまうへ」「ははうへ」が、それぞれ一例（『国史叢書承久記』（大正六年 国史研究会）による）見える。

(6) 現存の「あまのかるも」にも、「ままははのうへ」が一例（注（2）同書・上一八五頁）存するが、成立時期がはっきりしないことと、仮に改作本だとしても元の本の表現を踏襲したということも考えられるから、ここでは、検討例に加えないことにする。

(7) 実は、中世成立の可能性のある資料に、「ちちうへ」の例が見えないこともないが、ロドリゲスの記述などよりして、それらが誤写や誤刻でないとなれば、資料自体の成立時期を近世まで下げて考える必要がある。

父上にめぐりあわせたひ玉へ（『夢の通ひ路物語』巻三・昭和四七年 汲古書院・二九六頁）

めいどにまします父うへをとぶらひ申事もなく（『さくら

接尾語「うへ」の成立と展開

川物語』上・『物語文学の研究——本文と論考——』昭和四十九年 笠間書院、五二八頁)

(8) もっとも、江戸前期の「仮名草子」の『をさな源氏』(寛文一〇年刊)には、「あまうへ」が存するが、この作品は、『源氏物語』のダイジェスト版ともいうべきもので、「あまうへ」の使用は、『源氏物語』からの用語上の拘束による。したがって、原則的には、「あまうへ」を廃語と認めてさしつかえない。

(9) 「ひめうへ」は種彦の造語ではないようである。『修紫田舎源氏』では、「第二二篇」(天保八年刊)以降に限られている——「ひめぎみ」は「第二篇」(文政一三年刊)以後使わ

れている——が、『南総里見八犬伝』の「巻一八」(天保七年刊)までには、「ひめうへ」「ひめうへたち」を含むが、「ふせひめうへ」「はまちひめうへ」などは加えない)が一〇〇例も用いられており、『修紫田舎源氏』における「ひめうへ」は、『南総里見八犬伝』の影響による使用と思われる。

付記

本稿は、昭和五十五年十一月十六日に北海道大学国文学会秋季大会において、「接尾語『上』の成立と展開」と題して行った口頭発表を発展させたものである。口頭発表の折、御出席の先生方より有益な御助言を賜った。ここに記して感謝申し上げます。